教へたいといふ。妾はまるであの人が家人のやうな氣がする。ほんとに家の人だつたらどんなにいゝか！

＊　＊　＊　＊　＊　＊

日の經つのはまあ速いこと。何事もうれしいが、たのしいうちに時々かなしい感情が交る。神様にお惠を謝する傍から涙が眼にたまつてくる。あゝ溫かな朗かな日だこと。元氣は不相變いゝ。たゞたまさかほんのたまさかだ、かなしくなることがある。妾は幸福だ。ほんとに福幸だらうか。昨日の遊山はいつになつたら忘れることが出來やう。何といふ不思議な新しい可怖い感じがしたらう。あの人が見る間にあんな巨漢を捉まへてまるで球でも扱ふやうに湖の中へ投込んでしまつたときは喫驚りはしなかつたけれど……あの人がこはくなつた。全くあのときにはあの人の顔が惡魔のやうなすさまじい形相をしてゐたんだから。妾はブルッとした。けれど妾にはまだあの人がわから

なかつたのだ。それにあのときみんなが笑ひ出したもんだから、妾も一所に笑つたが、どんなにあの人に氣の毒だつたか、あの人はきまりわるさうにしてゐた。妾がゐたからきまりがわるかつたんだ。あとでもうすつかり日がくれてから、馬車の中でさういつた。それて妾はその顔を見やうとしたけれど、顔を見るのは何だかこはかつた。さうだ、あの人に冗談はいへない。あの人は天晴の勇士だ。けれどあの惡らしい形相、ブル〳〵震へる唇、眼の中が火のやうにもえて、どうしたてんだらう。それともあの人なんぞはひとりてにさうなるものかしら。あの優しい柔和なまゝては一個の男子一個の英雄とはなれぬものかしら。「人生は無情な冷酷なものです」とは、つい近日あの人がいつた事だが妾がアンドレイ・ペトロキッチにいふとあの人はまた Dのいふことを承知しなかつた。どちらが正しいだらう。だがけふの夜明の心持のよかつたこと。あの人とならんで歩いたおもしろさ。二人何も語は交さなか

つたけれど、けれど結局がすつかりついたんだから昨日の事も却つてうれしい。

＊　＊　＊

また胸がさわぎ出して――きつとどこか悪いんだらう。

この頃はまるで日記を記けない。何も書く氣にならないんだもの。また何をかいても妾の心の有のまゝ影をうつしえやうとは思へない。が妾が妙に胸がさわぐのは何故なのかしら。妾はあの人と長い間談話をして、いろ〳〵のことを覺えた。あの人は自分の計畫をのこらず話してきかした。(序にかいてをくがあの人の領首の傷のわけもわかつた。あゝあの人がが少して殺される所を危く助けられて、重傷をうけた時のことを考へたばかりて……)あの人は、戰爭がきつとはじまると云つて喜んでゐた。それでゐながらあんなにDが憐いて見えるのははじめてだ。何がそんなにふさぐことがあるんだらう。

父さんは、けふ町から歸つて來て二人一所に座つてゐるのを見ていやな顏をしてゐた。アンドレイ・ペトロキッチは夕方やつて來た。先よりは段々やせて色が惡くなつたやうな氣がする。(そしてそして妾がシュービンに對してあんまり冷酷なひどい處置をするといつて責めた)それにいつものやうには打とけない。妾の素振が素氣なかつたんぢやないかしら。そして突然シュービンの室に行つてしまつた。妾はすつかりシュービンのことは忘れてゐた。行つて逢つて和睦して置かう。今ぢやもうあの人のことなんかちつよも腹を立つてゐやしない。否この世の中に一人だつてにくらしいものなんかありやしない。アンドレイ・ペトロキッチは何だか咎めるやうな口氣で物をいつた。一體何のつもりなのかしら。どうして妾は内も外もさう眞暗だらう。何だか自分の身のまはりにも心の中にも、何か謎のやうな、何かとかねばならぬことが、わだかまつてゐるやうで。しかもこれは久しい前からだ。昨夜は寐られなか

つた。頭がギリ〳〵痛むだ。物をかくことは出來ない。あの人はけふ朝早く來たけれど、來るとすぐ歸つてしまつた。話したいことが山ほどある、何だか妾をさけるやうにしてゐるらしい。さうだ。あの人が妾をさけやう〳〵としてゐる氣振をたしかに見付けた。

謎は解けた。光明は開けた。神よあはれみ給へ。妾はあの人を戀してゐるのだ――僕だやしや御主人様は美しい方なあ（アエラグユー僕だつて肉體の慾を此の身に地獄やらかしたよ

十七

エレナが日記の最後に情の迫つた語をかきつらねたその當日、インサロフはベルセネフの室にゐた。卓子の傍には、ベルセネフが當惑のいろを面にうかべて立つてゐる。インサロフはいましがた、自分は明日モスコーへ歸る心算だといひだしたので。

『だが君』とベルセネフは聲に力をいれて『氣候はやつとこの頃よくなつたばかりぢやないか、一體モスコーへなんか行つて何うする氣か、しかもそんな突然に！　何か凶事の報知でもあつたわけじやあるまいね』

『僕は何の報知もうけやせん、しかし僕は一刻も此地に逗留することは出來んと思ふ』

『それはまたどういふ……』といひかけるのを、インサロフは遮つて

『アンドレイ・ペトロウヰッチ頼む……もうその事はいひ出さんでくれ、君に別れなければならんといふのは、僕は全く辛いが、どうも止むをえんのだ』

ベルセネフは凝然と友人の顔を見た。

『あゝもういくらとめても君はきくまい、ぢやさう定まつたんだね』

『十分定つたのだ』とインサロフは答へて、衝と立上つて室を出て行く。

良久してベルセネフは、室をこつ〳〵歩きながら考へ込むでゐたが、やが

て帽をとり上げてスタホフ家へと出かけた。

『何か妾にお話があるんでせう』二人限になつたところでエレナはかう訊いた。

『えゝ、ですがどうして御存じです』

『そんな事はどうでも宜ございますわ、まあお話といふのは何ですか』

ベルセネフはインサロフの思立の次第を語つた。

と、エレナの顏はみる〳〵蒼ざめて來て、少時は沈默のまゝで、やつと

『それはどういふんでせう』といふたのが關の山。

『御承知のとほり、あの男は、何をしてもかう〳〵いふ理由だからといつたことのない男です、ですが僕の考ぢや――まあエレナさん坐らうぢやありませんか、大層顏いろがわるいです……て僕の考ぢや、突然出立するには理由がある』

『エ、理由つてまあ何なんでせう』と壓かけて、吾にもあらず、女の力と思へぬほどぎゆつとベルセネフの手を握りしめたが、その手は氷のやうに冷えてゐた。ベルセネフは、寂しい笑顏をして『さあどういつたらいゝでせう、話は昔にかへるが、今年の春でした、僕がはじめてインサロフと知己になつた時分です、或晩親類の宅で彼男と一所になつたんです。所がその親類に一人非常な美人の娘があつた、その娘の容色には、インサロフも驚いたらうと思つてきいて見ると、たゞ笑つていふには、君の考は當らん、僕はまだ心を動かされんが、若しかその樣なことにでもなつたら、即刻其地を退いてしまふ、といふわけは、自分一個の私の快樂や幸福の爲に、畢生の義務や、事業を犧牲にするやうなことは出來んからといふので、その語に「僕は一個のブレガリア人だ、ロシアの少女を愛する必要は毫末もない」といふのです』

『ですが……何だつて……あなた……』とエレナは呟いて、上からうち下さ

れるのを避けるやうに首をすくめた。が始終ワナ〳〵とベルセネフの手をにぎりしめて離さないのだ。

『僕は……』とベルセネフもかすれた調子で『僕はその時にさうぢやなからうかと思つたことが、今度は本當になつたんぢやあるまいかと思ふんです』

『ではあの……あなたは……もうどうか後生ですから何も仰有らないで下さいまし』とエレナは急におろ〳〵ごゑになつた。

が、ベルセネフはかまはず早口に

『所がインサロフは、今は一人のロシヤの少女を戀するに至つた、それでいつぞやの誓言を守つて直ちに去らうと決心したと思はれるです』エレナはなほも堅く男の手を握りしめて、頭はます〳〵俛れてくる。羞恥しさに赫として、全面頭元まで火のやうになつたのを、見られまいとするもの〳〵やうである。

『アンドレイ・ペトロヰッチほんとうにあなたは天使のやうない〳〵方ねえ』といひかけて口ごもつて『ですがあの方暇乞には入來つしやるてせうねえ』

『くるてせう――え〳〵來ますとも、もと〳〵自分の心に反いて去るんですから』

『あの方にあの、あの方に……』

といひさして、少女の詞は杜絶れた、熱い涙がとめ度なくわいて出る。眞蒼になつてブル〳〵震へて、つと室をかけ出た。

『何といふ熱烈な戀だらう』とベルセネフは、徐々と家へ戻る路すがら考へた『あれほどとは思はなかつた、あなたは善い人だ……天使のやうない〳〵人だ……』とエレナはいつたが……あれを全然打明けて、自分にはせた本意は何てあつたか、これに何の親切があらう、何が親切なものか……彼方の腹をすつかりさぐりたい、一か八かしつかりした所をつきとめて見たいばかりに

爲た事だ、あゝもうこれでおちついた、二人は愛しあつてゐる、われはたゞ二人の戀の火を煽ぐ役をつとめたばかりだ、將來科學とロシヤの社會とを接近させる者は君だといつかシユービンはいつたが、まつたく媒人となるのがわれの運命だと見える、だがさうはいふものゝ、或は思ちがへかしらん、いゝやそんな筈はない』

アンドレイ・ペトロヰッチは可哀さうなほど沮喪して、さすがにラウメルに向ふ氣にもなれなかつたのである。

その翌日、二時頃にインサロフはスタホフ家を訪れた。すると丁度、あつらへ向きにその時アンナに客來があつた。客といふのは、近所の牧師の細君で、まことに好い人ではあるが、晝の日盛に路傍によつた池で、行水をつかふことがすきで、さる大將閣下の御家族が度々御通行にもなることだからといつても、どうしてもきかないので、始終巡査と仲が惡いといふのはこの人

だ。エレナははじめ、インサロフの足音をきゝつけると一所に、顏にはまるで血の氣がなくなつてしまつて、その時はあゝ知らぬ人が來つてゐるのでよかつたと思つたが、そのうち、このまゝインサロフが一言も自分に內密で、物もいはずに立つてしまうやうなことがありはしまいかと考へだして、急に鬱ぎこむてしまつた。インサロフもやはり胸がさわぐらしく、エレナの眼をさけやう〳〵とする氣振が見えた。『さう呆氣なくあの人に別れることが出來るものか』と、エレナは獨語つたが、さう思ふ傍から、もうインサロフは歸支度をして立ちかけたので、あはてゝ椅子を離なれて、インサロフを窓際へよびよせた。牧師の細君、これには驚いたらしく、若い人達が何をするやらのぞいて見たい氣になつて振向かうとすると、衣服がごそ〳〵いふので工合わるく、前の位置に復してしまつた。

その時エレナは口早に呼く、

『ねえよムんすか、妾あなたが何て被來つたか知つて〳〵よ、アンドレイさんにすつかり聞きましたもの、てすがねえ、後生だから今日コーントソフを立つのはよして下さいな、え、いゝてせう、そして明日の朝早くあさ十一時頃にても一度來て下さいませんか、妾少しあなたに申上げたいことがあるんてすから』

インサロフはわづかに點頭いて見せた。

『もう今日はお引止め申しませんから、ては屹度ですよ』

インサロフは再び點頭いたが、何もいはなかつた。

『ネリヤや一寸、まあ來てごらん、姨さんが奇麗な網嚢をもつてゐらしつたから』とアンナが呼ぶ。

牧師の細君も『妾が作へましたんてすよ』と追從笑をする。エレナは窓を離れた。インサロフは十五分とはゐなかつた。エレナは縞りインサロフの一

挙一動に目を着けてゐると、さよろ〳〵と何處を見るでもなく、ぢつかぬさまでやがてうつとり氣ぬけした體でスーつと姿をかくしてしまつた。

さてその日の暮れるのがおそいこと、やつと暮れると、今度は夜の長いこと、エレナは二三時間もじつと身動ぎもせず床の上に坐つてゐたが、沈着かぬ風で、窓際へ立つていつて、やけるやうな額を冷い硝子にくつ着けて見た。その間、始終たゞ一つそのことばかりを考へて考へて考へつめた。するうちに頭が勞れ切つてぼーつとしてしまふ。心臓は石のやうに堅くなつてまるて感じがなくなつてしまつた。たゞ顳顬がぴくり〳〵動いて、今にも裂けさうになつて來て、唇はカチャ〳〵に乾いてゐる。あの人はくるだらう……母さんに何も暇乞して行かなかつたし……欺しはしないだらう、けれどあの事は……あのアンドレイの云つたことは、眞實だらうか、あの人は思ひ違へてゐるのかもしれない、口ぢや來るとは云はなかつたけれど……あの人にこれつ

きり逢はずにしまふなんてことが出來るものか』此夜すがら、エレナの念頭に絶えず往來してゐたのは、このやうな思想で、いくら忘れやう〳〵としてもムラ〳〵と起つて、ムラ〳〵と消えてしまふ。雜ちがつて、濃い霧か何ぞのやうに胸にすつかり押蔽つてゐて、拂ひやうがない。『あの人は妾を愛してる！　ふとさう云ふ感じがさつと胸にひらめくと、一時にカアッとして、目を据えてじつと暗夜を見る、人知れぬ微笑が唇頭にのぼつて來る。が、憂欝げに首を振つて、兩手に頸首を押へて、またも濃霧のやうに恐ろしい心痛に胸はすつかりとざゝれてしまふのだ。夜明前になつて、衣服を着かへて床の上に横になつて見たが、眠つけなかつた。と、いつの間にか朝日の光がはじめて室の床の上にさしこむ。『あゝあの人さへ妾を愛してくれたら』と急に聲をあげて呼んで日光の頭の上にさしこむにもめげず腕をひろげた……

エレナは立上つて、衣物を着て、下へ降りて行つた。家の中はまだ寂靜まつて、コソリともせぬ。庭へ出て見ると、庭の中もこつそり靜まり返つて、樹々の綠がつや〳〵とすが〳〵しい。小鳥もゆつたり樂しげに啼き交す。自然がかう樂しさうなほどエレナの心はいよ〳〵かなしく暗い。『あゝ、あれが眞實でさへあつたならこの世界に妾ほど幸福なものはあるまいけれど、眞實であつてくれゝば……』と考へる。室へかへつて時間を潰すために、衣服を着替へはじめた。が、いくら着やうとしてもするり〳〵と衣服は手元をすべり落ちて、まだ着替のすまぬまゝで、姿見の前に腰かけてゐると、朝飯だと呼びに來た。階下へ下りてゆくと、母親はエレナの蒼い顏してゐるのを見付けたが、たゞ『お前まあ何て妙な顏してゐるんだえ』といつたばかりで、意味ありげな目づかひをして『その衣服は大層能く似合ふねこれから男の人に思ひつかれやうと思つたらそれを着るといゝよ』といつた、エレナは無言で卓に坐つた。

其中時計は九時を打つた。十一時になるにはまだ二時間。長いことだ！

エレナはまづ本を出して見て、今度は縫物をはじめる。また本をあけて見る。今度は庭の中を百度歩いて見やうと思つてさうして見た。それからまたもどつてアンナがカルタをとるのを見てゐるふりをして、じつと沈着いて辛抱して見る。で、しばらくたつて時計を出して見るとまだ十時にもならない。所へシユービンが這入て來たのでつかまへて話をした。自分でも何の罪をゆるしてもらふのか明確わからぬけれど、しきりにあやまつて見る。その云ふ一語々々に強いておし出すやうな風が見えるばかりか、こんぐらかつてわからなくなつてしまふ。シユービンは首を低れてじつをエレナの顔を諦視めた。さつと何か皮肉な冷語をいひ出すことゝまつてゐたのが、顔をあげて見ると悲しげな、やさしい顔をしてゐる。で、そのやつれた顔を見て微笑すると、シユービンも笑顔を返したが、何もいはず、やがて靜かに立上つて、室を出

ていつた。呼び返し度いと思つたが、その時は何といはうか語が出て來なかつた。とかくしてやつと十一時が打つ。いよ〳〵と思つてまつて待つて待ちぬいて耳を立てた。まう何も手につかない、もう何も考へるとも出來ない。心臟はどき〳〵高く打つて、それに何よりも不思議なのはいまのいま迄、時の經つのがおそくつて〳〵しやうがなかつたのが、今度はとぶやうに過ぎて行く。もう十五分經つた、三十分經つた、それからエレナの考では二三分も經つたと思ふと時計が鳴つたのを聞いて思はず吃驚した。十二時ではなく一時をうつたのだ。『あの人は來ないんだ、さよならとさへいはずにいつてしまうんだ』と思ふと、血はどつと頭に上つて來て、もう息がはづむて來る、喉はびくり〳〵とすせかへる心地。エレナは自分の室へかけこむて、顔に手をあてたまゝ床の上につゝぶした。このやうにして身動もせず三十分ばかり、熱い涙は緊とにぎりしめた指先から膝の上にしたゝか落ちる。と、突然坐つたま

身を起した顔を見ると、驚くべく變つて居る。顔の容子はまるつきり變つてしまつた。涙にうるんでゐた眼は乾き切つて、怪しく耀いて眉をぢつと寄せて、唇をきと引結んだ。このやうにしてまた三十分經つた。最後にエレナは耳を立てた……覺えのあるその聲で自分を呼んでゐるのではないか……つと起上つて帽を冠り、外衣を肩に引かけて、人目を避けつゝ家を抜け出し、チョコ〳〵と小走りにベルセネフの宿へと路を急いだ。

十八

エレナはやゝ屈み勝に、しきりと前の方へ眼を配りながら、急ぎ足に歩いた。何の恐るゝ事もなく、何の考ふることもない。たゞもう一度インサロフに逢ひたいばかりなので、それればつかりを思ひつゞけて居る。とうからまつ黒な、いやな雲が太陽に押冠さつてしまつて、颯々といふ風が木の間をかすめ

て、衣服の裾を吹きまくる。急に砂煙が往來に立初める。それもこれも氣にとまらぬ樣子で只管に道を急いだが……やがてポツリ〳〵と大粒の雨が落ちて來てもまだ氣が付かぬ。その間にざーつといふ大雨になつて、その合間に、は閃々と電光がする。轟々といふ雷の音、愛に至つてエレナは始めて立止つて怯づ〳〵四邊を見まはした。……と折よく直ぐ傍に枯井にさしかけて、毀れかゝつた辻堂があつたので、急いでその中へかけこむて、低い屋根の下にしばしの雨舍を求めた。雨はます〳〵瀧のやうに降り濺いで、天は見渡す限り墨を流したよう。エレナは落膽勢もぬけて、それてもまだ程なく上りそうな氣色てもあらうかと、頻りと空を眺めたが　インサロフに逢ふ望の網はもうこれで斷れてしまつたのだ。そこへ乞食の婆さんがやつて來て、慇懃に會釋して身體を搖りながら、「お嬢さん、私も雨宿をさして頂きますよ」と言つて、しきりに太息を吐き〳〵、石段に腰を卸した。てエレナが衣囊に手を

入れてかき探つてゐる樣子を見て、婆さんの黃んだ皺だらけの面はどこやらに美しかつた昔日の俤を見せて輝き渡つたが、呟く樣に『御孃さんお有難ふございます』と言つた。がエレナは衣囊に財布を入れてくることを忘れたことに氣がついても、婆さんまだ手を出してゐるので、

『お婆さん、妾今生憎持合せがないからね、これでも與げよう、何かになるだらうから』

といひつゝ手巾を出して與つた。

『へエ、へエ、お孃樣、まあ恁樣結構な手巾を戴いてどう致しませう、孫娘に婿でもとりましたらその祝物になと、ハイ〳〵どうも有難ふございます』

といふ途端に雷が頭上に鳴りはためいた。

『なむまみだ』と婆さんは口の中で誦して三度十字を切つたが、少時考へて

『私貴孃にはどこぞで御目にかゝつたようで、頂戴物をいたしますのも今度

が始めてゞはございませんですよ』

といはれてエレナは熟く婆さんの顏を視ると思ひ出したらしく、

『あゝ御婆さん、いつか妾になぜさう禱いているつて聞いたのはおまへさんだつけね』

『えゝ、本當にさうでございますよ、何でもお見かけ申したと思ひましたが不相變御心配がやまぬさうて、御らんなさいまし、涙で手巾がまア恁樣に濡つて、まあねえ、お若い娘御の心配事といへば、誰方も大抵同一でございませうねえ』

『心配事だなんて、何をいふの、御婆さん』

『何をいふつて？　いけませんよ、御孃さん、そんなことでこの婆がなんの、あなたの御心配事ぐらゐ、これでも貴孃一度は若い事もございましたし、散々恁樣苦勞は通りこして來たもんでございますあね、貴孃がいかにも御情深

い善い方だから、つい恁様事も申しますんですが、貴嬢にも誰方かそれ、この人ならばと見込むだ立派な殿御がおあんなさる。所で貴嬢は根が浮氣でないから、その方の事ばかり思ひつゞけて、死ぬまでも添遂げやうと……昔も今もこればかりは變りのない、いはゞ神事でございますからねえ、かう申したからつて喫驚なさらなくつても、これでも私占有者なのでございますよ、まあようございます、私この手巾を戴いてこれと一緒にあなたの御心配事ものこらず、さらつと持つてってしまひますから、それてもうよろしくおなりてせう、おやもう雨も大部小降になりました、でも貴嬢はも少し此處にゐらつしやいましな、私なんぞは馴れて居りますから少し位濡れても、てはよございますか御嬢さん、御心配事は根つ切葉つ切、もう〳〵これつ切り思ひ出しもなすつちやいけません、ては御免なさいまし、やれ〳〵なむあみだ』

かう云いすてゝ婆さんやをら身を起して、辻堂を出て行つた。エレナは呆

れた眼を瞬つて、跡を目送つたまゝ、思はず

『何を云ふんだらうねえ』と呟いた。

雨の勢がだん〳〵衰へて、折々は薄い日の光が洩れる。て、エレナももう外へ出やうと身構へると……その途端十歩の外にインサロフの姿をちらと見た。外套に深く首を埋めてエレナの行手に當る同じ道へと急ぐのは宿へ戻る道てあらう。

と見るよりエレナは石段の朽欄に手をかけて、男の名を呼ばうとしたが聲が出なかつた。その間にインサロフは首も擧げず、そのまゝすた〳〵行き過ぎさうにする。

『ヂミトリ、ニカノロヰッチ』とやつと聲を振絞つて呼ぶと、インロサフはつと立止つて、四邊をキョロ〳〵と見まはしたが、始はエレナが見つからぬ樣子て、呼ばるゝまゝにづか〳〵と傍へよつて來て、『やあ貴嬢！　貴嬢てし

たか』と叫んだ。

エレナは詞もなく辻堂に立戻ると、インサロフもその跡に跟いて、『貴嬢でしたか』をまだ反覆してゐる。

エレナはなほも無言のまゝ熟と探る樣なやさしい眼つきをして、男の顏を見上げたが、見られて男は眼を伏せた。

『拙宅へゐらしつたの』とエレナは問いた。

『否……貴宅ではなかつたのです』

『ぢやないんですつて』とエレナは反覆して、強いて笑顏を作つたが、『それぢや御約束が違ひましたわね、妾今朝から散々御待ち申しましたわ』

『ですがエレナさん、僕は昨日御約束はしなかつたですよ』エレナは再び和として顏に手を加へたが、其顏にも手先にも血の氣はなかつた。

『では妾達には暇乞もなさらずに行つておしまいなさる御つもりだつたの

ね』

『さあまあ』といつた聲はかすれて低かつた。

『えゝほんとにさうなの？　ては恁樣に親しく御交際した上に、わけへだてなくあれほどまでにした上に、こんな飽氣ない……爰で御目にかゝつたればこそ、さもなくばこのまゝ……』爰まで云ひかけて、エレナは聲が震へて來て、暫時詞は杜絶へたが『あの、ろくに御名殘を惜しむひまもないうちに出發つておしまひなすつて、あとの者がどれほど本意ない悲しい憂思をすることか……そんなこと何とも思つてゐらつしやらないんだわね』

インサロフは顏をそむけて『エレナさんどうかさう仰有らんで下さい、それでなくとも僕は心苦しくてたまらないのです、これだけの決心をするのは全く容易の事ではなかつたですよ、ちつとは察して下すつたら』

『そんなこと察したかないわ』とエレナの遮つた聲はうはずつてゐる。

『全體何故行らしやるの……それは餘儀ない事なんでせう、どうでもお別しなければならぬわけがあるんでせう、あなただつて何でもない事に朋友に悲しい思をさせる方でもないでせう、けれど恁樣にして朋友同志が別れられるでせうか、それとも私達二人は朋友ではないでせうか』

『さう、朋友てばないです』

『え、ぢやないんですつて』とエレナは呟いたが、頰にはさつと微紅を潮した。

『さうです吾々二人は朋友ぢやない、だから僕は去らうと思ふんです、この上僕は云ひません、いふを欲しない、否、決していふまいと思つてゐるんですから』

『だつていつかぢうはあんなに隔意なく物を仰有つたぢやありませんか』と半ば詰るやうな口吻で『ねえ覺えてゐらつしやるでせう』

『えゝその時はそうでした、元々何もかくすべき事がなかつたから、けれどもう今は……』

『今はどうして？』

『けれども今は……いやもう行きませう、ぢや御暇します』

インサロフがこの時、眼を昂げて視たら、自分の沈欝な曇つた顏をしてゐるとはうつて變つて、エレナの顏の晴々とかゞやいて來たのを認めた所だらうが、生憎後生大事と地面を睨めつめてゐるので。とエレナが『てはもう御別しませうかねえ、けれど爰で御目にかゝつた印にせめて手を……』と云ふ時にインサロフは手をさし出したが

『否それもいけません』と云つて再び面をそむけた。

『え、いけないですつて』

『えゝいけません、てはさよなら』と云ひすてゝ踵を返して辻堂を出やうと

する。

『まあ待つて頂戴よ、も少時ていゝんですから、貴郎が妾はこわくなつたんでせう、妾は貴郎よりよつぽど勇氣があつてよ』と云ふうちに全身はかすかにブルッと震へた。

『ぢやもう妾いひますわ……えよござんすか……妾一體どうして怎樣所にゐると思召して？　妾どこへゆく意志て出たか御存じ？』

インサロフは眼付に當惑の色を見せてエレナの顔を見た。

『妾貴郎の許へ行くつもりだつたんですよ』

『え、私の許へ』

エレナは顔を蔽ふて『あなたはどうしても妾にあの貴郎を愛してゐると云はせたいんだわねえ』と低聲になつて『あゝもう妾云ひ出してしまつたわ』

『エレナさん』とインサロフは叫んだ。

少女は男のさし出す手をにぎりしめて、その顔を見上げたまゝその胸に身を投げかけた。物もいはず抱きしめる腕に情をこめてインサロフは犀とエレナの胸を抱いた。改めて貴女を愛してゐると名のるまでもない。唯一こゑ叫んだその聲、見るまにかはつたその樣子、身も心も打任せてとりすがつたその胸の高波、髪の毛を弄るやさしい指ざわり、すべてエレナには男の語る戀の詞ときかれたのである。男は何も云はぬ。女も何も聞かうともせぬ。『その人は茲にゐる、その人は妾を愛してゐる……この外に何の望む所があらう』

今や身の願は足りた。外に何の求むる所があらう、『あゝあたしもう、うれしくつて、』と叫ぶが自づと唇を洩れたが、それともこの胸は果して男の胸か、はた吾が胸か、いかなればしかくこゝちよく波打つて、やがては吾胸にとけ入らうとはするぞ？

男は默然として身動きもせず、胸にまつはる少女を犀と堅く抱きしめてゐ

たが、やんはりととろけるやうな情感、云ひ知れぬ歡樂の念に、思上つた意氣も碎けて、つひに覺えぬ涙が眼にあふれ出るのであつた。少女は泣かなつた。たゞ口の中で『あゝ妾もう、うれしくつて』をくり返へすのみである。で、この樣にして十五分は過ぎた。男はなほ少女をしかとかき抱いてゐた。が終に、

『ではこれからは運命の導くまゝ、私についてどこへでも行きますか』

『えゝどこへでも、世界の極へでも行くわ、あなたのゐらつしやる所なら妾は屹度』

『しかしあなたは自らを欺くとは思ひませんか、二人は結婚すると云へば、御兩親の御不承知なのはわかつてゐろてせう』

『妾は自分を欺きはしません、その事は承知してゐます』

『それから私の貧窮で——乞食同樣な身分といふことも御承知てせうね』

『それも承知ですわ』

『それから私の魯西亞人でないことも、魯西亞には長く居られぬ身分と云ふことも、貴孃には本國とか一門とかにつながれた羈絆を絶つてもらはねばならむと云ふことも』

『承知よ、承知だわ』

『それから私は今一身を勞するばかりて何の報いもない事業に捧げてゐることも、私……否、吾々はたゞに危難を冒すはかりでなく窮迫に苦しみ、汚辱をうけ、或は……』

『えゝもう承知よ、みんな承知してゐてよ……妾はあなたを愛して……』

『それにあなたはいま迄の生活をすつかりすてゝ、たゞ一人異鄕の人間の中に交はつて、或は勞働までも共にせねばならぬと……』

少女は皆までいはせず、男の口を押へて『妾はあなたを愛してゐるわ』と

いつた。

愛に至つて男は女の纖細い美しい手に熱き情をこめて接吻した。エレナは敢て手を引こめやうともせず、小兒らしいあどけない樣子をして、手といはず、指先といはず燃ゆるやうな接吻を加ふる男の顏を、うれしげにながめてゐたが——

と急に顏を赤らめて、頭を男の胸にうづめた。男は物やはらかに女の顏を引き起して、凝とその眼にながめ入つたが、聲高く『さらば神と人との前にわが妻の幸を祈る』

十九

それから一時間の後、エレナは片手に麥藁帽子、片手に外套を抱へて靜かに客間に歩み入つた。髮はやゝ亂れて兩頰にほんのり紅味を見せ、唇邊に微

笑をたゞよはせたまゝで、半ば瞑つた眼瞼の底にも嬉しさうな色をつゝむてゐる。ぐつたりと動くのも大儀なほど疲れきつてゐるが、その疲れたのが却てうれしいので、と云ふよりはもうかうなれば物として樂しく嬉しからぬものゝないのが當然だ。何物を見ても吾に笑みかけるやうに思はれる。ウワル、イワノヰッチは丁度窓よりに坐つてゐたが、と見るよりエレナはつか〳〵と傍によつて、その肩に手を載せて、すこし窺き込むやうにしてやると、もうわれ知らずほく〳〵と笑ひくづれるのであつた。

『訝！　どうしましたな？』と老人、不意を喫つてきいたが、何と云つたものか自分にも解らず、只何かなしに爺さんに接吻してやりたくなつたが、たゞ

『だらけちやつたわ』といつた。

が老人莞爾ともせず、依然呆れた顏をしてエレナの凝視めるばかりだ。エレナはかまはず帽子も外套も爺さんに打かけて

『ねえ、おぢいさん、妾眠くて仕やうがないのよ、もう大變疲れちまつて』てまた莞爾してその傍の低い椅子にべたりとなつた。

『はゝあ』と老人口の中で頻りと感嘆して『はゝあ、なる程てげせうよ――いかさま――』かふ云ふ中に少女は四邊を睇廻して心中に『もう程なくあれもこれもみんな御別れになるんだけれど……奇怪いわね――妾ちつとも怖ろしいとも心殘りだとも……あゝさうぢやないわ母さんは屹度かなしいと……』と思續ける中に再び辻堂を目に浮べて來ると愛人の聲がまた耳に響く、その人の腕の吾身にまつはるのを覺える。胸はうれしく〳〵皷動いたが力は弱かつた。歡樂の思に心臓も壓されて痿え勞れてゐるのだ。乞食婆さんがまた思出される。『あの婆さんは眞實に妾の心配をみんな持つてつて呉れたんだよ、あゝほんとにうれしいわ、こんなこととわね え！ それにから早いとは！』

この時、情のゆくまゝにまかせてをいたらば千行の涙となつて溶け出やうと思はれたのを强ひて笑に紛らした。かうしてゐるのが何よりも安らかな快い限なので搖籃にのつてゆられるやうな心持になる。今は擧止にゆつたり決着が出來て先刻までのそは〳〵した風はなくなつた。そこへゾオヤが這入つて來たがこんな可愛らしい娘を見るのは初めてのやうにエレナは思つた。跡からアンナもやつて來た。と見ると胸は迫つて――がつと椅子を離れて優しく母を抱いて、まづ額に接吻して白髪になりかけた鬢の毛を柔かに撫でる。それから自分の室へ歸つて見ると何もかもうれしそうに見えること！ 心ひそかに勝誇つて寢臺――たつた三時間前まで悶え〳〵て輾轉つたその寢臺に坐つて見る。

『だが、あの時分だつて妾あの人の愛してゐることは知つて居たわ、いーえもつとずうつと前から……あゝ、よそう。こんな事考へてはすまないわ。』と

思ひ乍ら『吾妻に幸を』と呟いて見て顔を蔽うて突伏した。

夕方になつて、エレナは漸く沈んで來た。一度インサロフに別れては重ねて逢ふ折も遠い事と思ふとうらがなしくなるが、インサロフは何分ベルセネフと一緒に居ては氣どられずにはすまぬゆえ、二人の取決めた相談は、インサロフは直ぐ莫斯科へ歸つて此秋までに二三度は屹度訪ねる事にする。エレナの方はかゝさず手紙を出す約束をしてあはよくば其内ユーントソフの近傍で何處かで逢引をしたいものだといつた。茶に招ばれて階下に來て見ると全家中そこに集つた中にシユービンも交つて意味あり氣な眼づかひをしてエレナを迎へた。この人と昔日の打とけた調子に返つて談話して見やうかとは思つたが、或は自分の心中を看透されはしまいか、否われとわが身が抑へきれるかそれが氣づかわしい。ことにはシユービンが二週間以上も自分によそ〳〵しくしてゐるには仔細のあることと思つても見る。と、少時してベルセネフが

訪ねて來て、インサロフが暇乞にも來ず、莫斯科へ立つてしまつた詫言を傳へた。其日エレナの前でインサロフの名の出たのがこれが始めてゞ、きくうちにもエレナは顔の熱るを感じた。が同時に、折角御馴染になつたのに急の御出立で御名殘惜しうムんした位は言つて然るべき所とは思つたが、そんな空々しい事を口には出せないので語もなく身も動かさず坐つてゐた。エレナはベルセネフの傍を離れぬ樣にしてゐた、其癖この人には自家の心裡の秘密を幾分か悟られてゐるのであるが、不思議に氣が置けなくて、始終じつと——いつもの巫山戯たとは違つて眞面目に見詰めてゐるシユービンの眼を避けるには屈竟の隱家なので、ベルセネフも其夜は何とやら解せぬ面持でゐた。エレナがもつと欝きこむでゐる筈と思つた豫期がちがつたからである。幸ひと二人は何か美術上の議論を始めたので、エレナはそつとかげに退いて二人の聲を夢心地でこつそりときいてゐた。その中漸次二人ばかりか全室が、身

邊をめぐる一切の物が、たゞ夢とばかりたゞ〳〵しく――卓子の上の茶缺もウワルの短い單衣も、ゾオヤの綺麗な爪先も、壁にかけたコンスタンチン大公の油畫像も何もかも朦朧と霧がかゝつて次第に消えて行く。たゞ何かなし外の人が笑止らしい。

『何の爲にあの人達は生きてゐるだらう』とひとりごつても見る。

『エレナやお前さん眠いのかえ』と母親は聲をかけてもエレナは耳に入らぬ樣子。

『ぢや充分根據のある疑と君は云ふんだね』とシューピンの鋭い聲にエレナを夢現からさまされた。『よろしい』とシューピンはなほつゞける『けれどもそれが眞正の美術の尺度だといふことと忘れないでくれたまへ、全くの疑ならとてもかたづかない。多くの罪人は平氣でこれをこらへる、けれど半分でも眞實だと、とてもこゝへこれるものぢやない、心を苦め、なやますのに違ひな

い。例へばエレナさんが僕等二人の中の一人を愛してゐるとするとしたらどんな疑が起ると思ふ？』

『何だつて寢ないんだらうねえ』とアンナは呟いたが、實は自分が今夜は眠くてたまらぬのでしきりと他人を寢床へやりたがるので『御免蒙つてお前ほんとに御休みな、アンドレイさんに御挨拶して』エレナは母親に接吻し、人々にはちよいと挨拶して室を出て行つた。シューピンは戸口まで伴いて來て、低聲に『エレンさん、貴嬢はこのパウル君を踏んだり蹴つたり散々な目に逢はして氣の毒とも思はないんでゝね。それでもパウル君は貴嬢を崇てゐる、貴嬢の足の先に引かけた靴、否、其靴の踵までも頂くですよ』

エレナは肩を聳していや〳〵乍ら手を出した――それもインサロフが接吻した方ではない。それから室へかへると直ぐ寢衣にきかへて床にはいつたそれからすや〳〵と寢入つて――、幼くして病上りの枕元に母親が搖籃を

看護つてぢつと呼吸の音に耳を澄ましたその昔にも覚えぬほどの圓かな夢に入つた。

二十

翌日、目覺てまづエレナの胸に覺えたのは、歡樂と恐怖との入れまぜた、えたいのしれぬ感情であつた。『ほんとだらうか、ほんとだらうか』と、絶間なしに胸に問ひつ答へつして嬉しさに氣も遠くなる。さま〳〵の思出が群つて來て……勞れてぼーつと亂れ心地になる。と、いつしかまた樂しい平和のおもいにつゝまれて來る。が、其の中、時間が經つにつれて不安の情におそはれて、其日は一日、胸安からず懶くて過ぎた。エレナは久しい間知らう〳〵と憬れたことを、漸く今に至つて知りえたのではあるが、これが爲めに心はすこしも安まりはしないのだ。あの日の終生忘る可らざる會合によつて自分

はとこしへに舊窩裏を脱した。自分の立つて居る所は、遙か遠いものになつたと思ふけれど、さて自分の四圍をみまはして見れば百事一に依然たる舊態をつゞけて、何事の變化が起つたとも知らぬ顏でゐる。ありしながらの世は、ありし乍らの手振を變へず、エレナのこの中に住み、この事にたづさはるのを求めて居る。エレナはインサロフへ遣る手紙を書かうとしたが、これも果さなかつた。紙上にのぼる文字は、生命もなく慘ない空なものに思はれるのだ。日記はその末尾に、太い黑線を引いて、放棄してしまつた。これは過去の夢である。今よりは、偏に思ひを未來に馳すべきであると思つたのである。

微塵もそれを氣どらぬ母の傍にゐて、益體もないことをとひつ答へつするのが、エレナには罪惡のやうに思はれてならぬ、自分の所行がどうやら僞善者の事のやうに感ぜられ、何も赤面するには當らぬ筈と思ひ乍らも、心は思

以亂れる。で、あとは野となれ山となれ、いつそのことみんな打明けてと思ひ迫つた事も一度ならずであつたが、さて考へて見ると、何故デミトリはあの時彼所で、あの辻堂でこれから何處へでも一處に連れてゆくと云はなかつたらう、あの人は神に誓つて、妾を妻にすると云つたのではないか、何だつて今頃妾はこんな處に居るんだらう。かうなると、もう急にエレナは人に羞耻む心を覺えるので、ウワルをさへ避けるやうにする。て老人ます〳〵面食つて、やたらに指を弄りまはしてゐる。もう我身を圍るもの何物も優しく懷かしいものではなくなつた。夢とさへも思はれぬ。いや、惡夢のやうにどつさりと胸にのみ被つて動かない。自分を咎めるやうな、憤るやうな、そして自分の心中を察してくれやうともせぬ……『何と云つても、汝は矢張こちとらの仲間さ。』といふ聲の聞える樣な、自分の手飼の小犬や、捨てられた小鳥や、犬猫までが——自分に對する眼付は——自分にはどうもさう思はれてならぬ——猜

忌の敵意をさし挾んでゐる樣だ。この樣な事を思ふのはすまない、恥かしいとは思ふけれど……。『どうしたつてこの家は矢張妾の家だ、妾の一族だ、妾の祖國だ。』と思ふ傍から、外の聲が『否々こゝはもう汝の家ではない、汝の祖國ではない。』と云ふ。怖しさに、心は奪はれて、われとわが腑効なきを責める。心中の苦悶は、やつとこれから始まらうといふのに、堪へる力はすでに脱けてしまつた……こういふ筈ではなかつたのだが、と云つた所で、一度騷ぎ出した胸の靜まるのは、容易の事ではない。併し、一週は一週と經ぎる中に、漸く氣分もをさまつて、新らしい境涯にも馴れて來た。この間二通の手紙をインサロフに書いて、自分でそれをポストに入れた。一つは羞かしさ、一つは矜誇の心から如何にしても之を下婢の手に托する氣にはならなかつたので。で、もうそろ〳〵其人のやつて來る時分と心待ちに待つてゐると……ある朝やつて來たのはインサロフではなくて、父のニコライ・アルテムキッチ

てあつた。

二十一

スタホフ中尉が其日のやうに苦り返つてしかも威儀正しくとり澄して居た事は家人の曾て覺えぬ所で、まづ外套に帽子、佩劍の鞘を鏗々とさせて大股にのつし〳〵と客室に歩み入り、姿見の前に突立つたなり、自分の姿に惚々とながめ入つて得意氣に首を搖る、口髭を捻る、アンナが例によつてそゝくさと迎へると帽子もとらず挨拶もせず默りで鹿革の手袋をはめたまゝエレナに接吻さした。病氣の工合はどうですと聞いても返事もしない。そのときウワル老人が這入つて來たが一寸流眄をくれたばかりで『フン。』といつた。いつもウワルに對しては冷淡に尊大にふるまふので、其癖その人のスタホフ家の血統を認めてゐるのだが。誰も知る通り、露西亞の貴族といふものは大抵

その一門に限られた特別な容貌體質を遺傳してゐるものと信じてゐる。で、『ポドサラスキンスキイ鼻』とか『ペレブリーウスキー頸』とか云ふ類のことがよくこの社會の談柄に出る。次に來たのはゾオヤでニコライに向つて丁寧に禮をしたがニコライはヴームと唸つたまゝ長椅子にどさりとなつて咖啡を味ひ、さて後始めて帽子を脱いだ。やがて咖啡が出てそれも呑んでしまふと、一座の人々の顏をずらりと見渡して、齒の間から唸る樣に佛語で『ソルテエシイル ヴゥプレイ どうか皆んなあつちへいつて下さい』といつて更に妻の方を向いて『エヴゥマダム、レステ、ジュヴゥプリー それから奥さんどうかおのこり下さい』

て、アンナを一人のこしたまゝ人々は室を出ていつてしまふ。アンナはびく〳〵ものて、頭をブル〳〵震はせてゐる。ニコライの容子があまり嚴肅なのに氣を呑まれて何事が始まつたかと安い心もなかつたので。

『まあどうしたんです。』と室の戸の閉ぢられる間をそうつとアンナは口を開

く。

ニコライはすました顔をしてアンナを見やり、『何に、別に異つた事ぢやないさ、何もそんなに目を圓くせんでもいゝ事よ。』と一言目に用もないに口端を曲げて『なにけふ午餐に珍らしい客人を呼ばうと思ふから前以てその話をして置かうと思つてさ。』

『それは誰方。』

『エゴール・アンドレーキッチ、クルナトウスキーといふ人でな、お前は知らんが、元老院の一等秘書官を勤めらるゝ方ぢや。』

『では其御方を午餐に御招びなさるんですか。』

『さうよ。』

『ですがたゞそれ丈の事を仰有らうばかりに御人拂をなすつたの。』

ニコライは再び――今度は皮肉な眼付をしてじろり妻の顔を見て

『それて喫驚したといふのか、たんと喫驚するがいゝさ』それつ限ニコライは口を噤んでしまふ。アンナも少時詞はなかつたが

『妾、また……。』と云ひ出すと、

『いゝよ』と突然遮つて『お前は私を「不品行」な者にしてゐるんだから。』

『あの妾が。』とおど〳〵してアンナは思はず聲が大きくなる。

『だがそれも道理かもしれんさ、おれもいつかぢうは隨分お前の氣に入らん事もやつたからな、それを嘘といやせんさ、だがお前だつて、そんな弱い身體をして病つてばかりゐるんだからな……。』

『だから妾何も苦情なんかいやしません。』

『セ、ポシブルれんて 何にしてもおれは自分の爲る事をいゝとも惡いともやせん、時が經てば自然にわかるんだ、けれど念の爲にことはつてをく、おれはこれでも自分の義務はわきまへてゐる、一家の安危と云ふ事も自分にま

かされて見ればなか〳〵忘れる男ぢやないのだ。』

『まあ、何をいふんだらうねえ。』とアンナは怪しむだか實はつい前の晩のこと英吉利倶樂部の喫煙室で、一體ロシア人は雄辯の方があるとかないとかいふ議論がおこつた時、中の一人が『ぢや吾黨の中に演說の出來るものがあるか、あるなら敎へてもらいたい。』と云ひ出すと『それ直ぐそこにニコライ・アルテムキッチの樣な人があるぢやないか。』といつてニコライの方を指したものがあつた。それてニコライ大得意て反りかへつてゐたとはアンナの夢にもさとる所てなかつたのて。

『たとへばあのエレナぢや。』とニコライはなほ詞をつゞける。『もうしつかり身を固めさしてもいゝ時分ぢや――つまり結婚させたらどちぢやと思ふのだが、あれの哲學いぢり慈善いぢりを決して惡いとはいやせんが、物には大概方圖のあつたものて幾歲になつてもそれては困る、もう能加減夢ばかり見て

ゐずと美術家だとか、哲學者だとかモンテネグロ人か何かしらんがそんな連中を對手に巫山戲まはつてばかりゐずと、ちつとは世間の人並に身を持つ方角がつきさうなもんぢやないかとわしは思ふ。』

『一體まあ何を仰有るの。』

『まあ、少時靜にして聞いてゐてもらひませう。』と尙演說の姿勢を續けたまて『ては簡單に橫道に外れぬ樣に話をするがね、わしはその知己になつたのぢや、そのクルプトウスキー氏といふ若い人と親交を結んだのぢや、つまり家の聟にしやうと思つてな、まあお前も一目その人に逢つたがいゝ、決してお前はわしの判斷を偏頗だとか輕躁だとかいつて咎めることは出來まいとわしは敢て考へるのだ。(先生から自ら話す間にも自家の雄辯にわれ乍ら感服してゐるので)其方は最高等の學校て法律を學つて學問は充分あんなさる、禮儀作法は正しいし、まだやつと三十三ぢやが一等秘書官で大學の評議

員でスタニスラスの頸章を授かつた方だ。だが斷つておきますよ、わしは位階とか勳章とかそんな事にばかり目をくれる世間並の父親とは違ふんだから、たゞお前の口からエレナは實世間に活動する人が好きだときいたから、このエゴールさんなぞは世間でも幅のきく人だから、よからうと思つてさ。それに今一つ娘には慈善といふ病があるが、所で、エゴールさんはお自分の俸給で充分樂に暮せる見込がつき次第――いゝかい、こゝだよ。――直ぐ阿父さんから讓られた財産を御兄弟の人達に分けてやつておしまひなさる御心意だとさ。これなぞも立派な慈善だらうぢやないか。』

『で、その阿父さんと仰有るのは。』

『阿父さんかい、これがまた仲々の偉物でね、非常な道德家で眞のストイックと謂つていゝ方だ、元は退職の少佐で、今か？今はね、B―伯爵の領地の總管理人をしておいでなさると思ふが。』

『へゝエ。』

『へゝエだ、何がへゝエだ、人のいふ事をまだ茶にしてゐるのか。』

『エ、妾何も申しは致しません。』

『何、いはんことがあるものか、まあ、何でもいゝ、どのみちおれの意見はさうと心得てゐてもらひたい、それて今日はクルナトウスキー君が御出になつたら充分待遇に粗略のない樣にしてもらはう、いや、是非してもらはんければならん、モンテネグロあたりの漂浪者とは違ふからな。』

『無論ですとも、料理番のゾンカに吩附けて別製の御料理をこしらへさせますから。』

『おれはそんな些事は知らん、どうともいゝ樣にするがいゝ。』とニコライは言捨てゝ立上り帽を冠つて口笛を吹きながら（口笛を吹いてもいゝのは田舍の別莊か廐の中ばかりだと誰かにきいた事があるので）庭の中を散歩した。

シユービンは自分の室の小窓から其のさまをながめてそつと舌を出して居る。

四時十分前といふに雇馬車が一臺スタホフ家の門内にとまつて元氣らしい顔をした、一見質素に見えて居て、それで仲々金のかゝつた服裝をした若い男が下立つた。若者は名刺を通じて、エゴール・アンドレエイウィッチ・クルナトウスキーと名のつた。この話はこゝでやめて、その代りその翌日、エレナがインサロフに送つた手紙を紹介しやう。

「なつかしきヂミトリの君。

喜んで下さい、妾の夫になる人が出來ましたから、その人は昨日妾達と一緒に午餐をたべました、何でも父さんが英吉利倶樂部で知己になつて、それで家へ呼んだんでせう、尤も昨日はじめて來たときは何で來たか知りませんでしたけれど、母さんが、父さんの所思を聞てゐたと見えて妾にさういつて

耳打したのです、名はエゴール・アントレイキッチ・クルナトウスキーといふんで元老院の一等秘書官だとかいふ事です。まづその人の風采から申して見ませう、身幹は中背であなたほど高くはないけれど中肉の姿のとゝのつた方でせう、はつきりした容貌で髪の毛を短く刈込み大きな口髯をはやしてゐますが、眼は小くて(あなたのやうだわ)茶いろで鋭く平たい大きな口で、眼元にも唇邊にも始終笑をふくんでゐますけれど、あれが御役人笑とでもいふんですか何だかいつも御義務で笑つてるやうよ、擧止は極淡素した方で、いふ事が一々精細で、いふ事ばかりぢやない何もかも精細で、歩くのでも笑ふのでも物を良くなんでもまるで御義務にしてゐる樣だわ、てかういつたらあなたは屹度『まあ大層細かく研究しだもんだな』つて仰有るかもしれないけれど、さうよ、さう細かくしらべてあなたにしらしてあげやうと思つたからですもの、それに考へてもごらんなさい、かりにも自分の夫にならうといふ人

ぢやありませんか、それて大層堅苦しくかまへてゐるけれどそれでゝどこかぬけた空虚な所もあつて――つまり正直なんだわね、みんなもあの人は實に正直な人だと云ひますもの、あなたも隨分堅苦しいけれど、この人とはまるてちがふわ、午餐のときにはその人が妾の隣に坐りむかひあつてシユービンが坐りました。はじめ談話の緒は商業上の企業のやうなことからきれました が、みんなの噂では、この人は大層商業の方は明るいのださうで、何か大きな工場か何かを經營する爲に官職をすてやうとしたこともあるさうです、やればよかつたのに惜しい事をしたと思ひますわ、それからシユービンは演劇の話をはじめましたら、クルナトウスキー氏はつまらない謙遜なんかやめて有のまゝに云ひますが――美術なぞといふことはてんで頭にないといふ口吻でした、さういふとあなたを思出しますけれども、妾考へると貴君にしろ妾にしろ美術を知らないといふにわけがちがひますわ、はつきりさうとはいは

ないけれど、この人に云はせると、『私は美術なんてことは知りません、そんな物は全體全く贅冗なもので國が治まつてゐればこそそんなものを人が許して置くんです。』といつた樣な調子です、聖彼得堡や上流社會などを口にすることを好まぬ風で、自分から一介の平民だとさへ名のつて、『私は勞働の民です』といふ口振でした、其時妾は若しこんな事がチミトリさんの口から出たらどうしやうと思ひましたわ、けれどあの人なんかたんと自分の事ばかりをらさうに吹聽するがいゝわ、妾にむかつては大層丁寧だけれど、その謙遜がわざとらしく腹の中では人を下目に見てゐる風があつて氣にくはないつてありやしないわ、それて誰を譽めるんでも、何某氏は主義の人ですといふのがおきまりの文句なんです、つまるところまづ自信の強い勤勉な自分を犧牲にしては厭はない(ね、妾、公平てせう)つまり自分の利益を犧牲にするといつたやうな人らしいんてですが、それてゐて大變な專制家よ、こんな人に抑へ

つけられる女は可哀さうだわ、これも午餐の時でしたか賄賂の談がはじまつたらその人のいふには、

『大抵の場合、賄賂をとる人に罪はない樣です、其人の身になればとらずにはゐられんからとるんだ、だが、一度發覺したときは容赦なく罰せんけりやなりません。』

『ては罪のない人を罰するんですか。』と妾がいつたら、

『さうです、それも主義の爲です。』といふぢやありませんか。それでシユービンが、『主義とは何の主義です。』と問ひかへしたら、うるさくなつたのか不意をうたれたのか、『それは說明するまでもありません。』といつたばかりでした、すると、父さんはこの人に心醉してゐるもんだから口を出して、『勿論、するまでもない。』といひました、これで談話はおしまひ、惜しかつたわ、晩方ベルセネフさんが訪ねて來て二人の間に恐ろしい激論がはじまつて、あの

人のいゝアントレイさんがあんなに激したのは妾はじめて見てよ、クルナトウスキー氏だつて決して科學的敎育とか、大學の學課とかいふことを無用だといひはしなかつたけれど、そんなものは體操學校と同一に見てゐる樣なことをいつたんです。食後でした、シユービンが妾の許へ來て『あの奴さんもどこかの人も（シユービンは妾に向つては決してあなたの名を口に出したことはありません）どつちも實務一點張の人だが、隨分のちがひ方なものさね、こつちは眞の生きた理想といふ者をもつてゐたがあの奴さんと來たら義務の觀念さへもたぬ、たかゞ御紋大事と盲滅法界に勸めるといふ外に能のない人間だね』といふんです、いかもにも尤な評だと思つたから覺えてゐて知らせてあげるんですよ、けれど妾に云はせれば、二人の間には全然似た所なんかありやしないわ、あなたには信仰といふものがあるけれど、あの人には何にもありやしない、自分ばかりいくら信仰したつて信仰にはなりませんものね、

その人の歸つたのは其晩をそくてしたが、それでも母さんから一寸妾が大層この人の御氣に入つたとかて、父さんは大恐悦でゐらつしやるつて話をきゝました、妾もきつと主義の婦人だとてもいつて譽められたんだわね、妾その時餘程御氣の毒樣ですが、妾にはもう歴然とした夫がありますといつてしまひたかつたけれど、一體父さんは何だつて貴方をあんなに嫌ふんでせう、母さんの方は直きとどうてもなるけれどねえ。

あゝ、妾あんまり頭が病めてしやうがないから氣晴しにと思つて隨分長つたらしくかいてしまつたわねえ、妾もうあなたといふものがなければ生きてゐてもつまらないわ、絶えずあなたの聲がしたり、顔が見えたりしてしやうがないの、この頃は貴郎がくるか〳〵と思つてまちこがれてばかりゐますわ、けれど妾の宅へはゐらつしやらない方がいゝわ、來たつてお互に氣まづく不快な思をするばかりですからね、やはり今この手紙を書いてゐる所御存

知だわね、あの林のなかでね、さらばなつかしきいとしき〳〵君！。』

二十三

クルナトウスキーが、はじめて訪ねて來てから三週間の後、アンナ、ワシリイヴナは莫斯科へ歸つて、プレチスケンキーの近傍の、大きな木造の家に住むことになつたので、エレンは非常に喜んだ。其家といふのは、窓毎に石膏塗の圓柱や花飾や竪琴がついて、下女部屋になる張出の長屋もあり、家のうしろには園もあり、前には大きな芝生があつて、中央に泉水を設け、其傍には犬舍もある。例年ならアンナのかう早くから田舎を出る事はないのであるが、今年は初秋の冷氣に、もう辟易してしまつた。ニコライはニコライで、療治がすむて見ると、妻が戀しくなる。それにアウグスチナは蝋を訪ねてレヴェルに行つてしまふ。結局みんなから田舎が飽き〳〵したのだ。ことにはニコ

ライに云はせれば、その『平生の計畫』を遂ぐるに不便を感じて來たからなのだ。

さていよ〳〵もう二週間て立つとなつてからがエレナには長かつたこと、クルナトウスキーは、日曜毎に二度づゝ、外の日は仕事が忙がしいので、其來るのは實はエレナに逢ひに來るのだが、いつも大概ゾオヤと談話して歸る。ゾオヤはこの人が大好で、その男らしい顏をながめ、その謙遜らしくて、然も我の強物言振にきゝほれて、心中にダス、イスト、アイン、マン、この人こそほんたうの男だと考へて居た位だ。ゾオヤに云はせればこの人ほどの美しい聲をもつて居る人、巧みな發音する人は今迄見た事がないのだ。イサンロフは、其後まるてスタホフ家に寄りつかなかつたが、エレナとは内々で一度兼て云ひ合して置いた莫斯科河岸の樹蔭で出會した。が、これは——僅か二言三言交した計りて別れてしまつた。シユービンはアンナと共に、莫斯科に移り、ベルセネフも其跡を

追つた。

その日、インサロフは獨り其室の中に坐つて、ブルガリヤから遣した手紙を三度までくり擴げて讀んて居た。郵便に托するを氣遣つて、人傳に送つて來たのである。手紙の文言は、非常に彼の心を搔き亂した。東方の事件は、愈切迫して、ロシヤ軍隊の侯國占領は人心を驚愕せしめて居る。風雲は刻一刻急に遠からずして、戰端の開かるべきを何人と雖も感ぜぬものはない。到る處に燃え上つて居る火の手は、何處まて廣がり、とこて止るか何人も豫知することは出來ない。舊い怨恨や、積年の希望や、何やかやこの時を得て起り立たうとしてゐる。インサロフの心臟は劇しく波打つた。彼の夢想の成らむとするもこの秋てある。『だが時機尙早さにすぎはせぬか、折角の勞力もあだとなりはせぬか』と獨り胸に問うて、堅く拳を握つた。『吾々は未だ用意がとのはんのに、もうさうなつてしまつたか、併しやる丈はやらねばならん』

と、その時、何やら戸の外にさら〳〵と當る音がしたと思ふと、急に扉は開いて、エレナが室に驅け入つた。

インサロフはブル〳〵身を震はせて、つゝとその方へ走せ寄つて、其前に膝づき、女の身を犇と胸に抱きしめた。

『妾が來るとは思はなかつたでせう』と二階を急いでかけ上つて來たばかりの息せはしく『あゝうれしい〳〵』と兩手を男の首にかけてあたりを見廻したが『ぢやこゝがあなたの御宿なのね、妾直さ見付けたのよ、此宿の娘が案内して呉れたもんだから、妾達は一昨日此地へ來たの、よつぽど手紙でさう云つてあげやうかと思つたんだけれど、どうしても自分で來る方がいゝと思つてね、妾ほんの十五分ばかしかゐられないんですから、まあ立つて戸を締めて下さいよ』

インサロフは立上つて、手快く戸を閉めて、さて女の傍へ立戻つて、其手

をとつたが物が言はれない、餘りの嬉しさに胸が迫る。女は微笑を含んで男の眼を睹入つた……其眼は歡びに燃えて居たので……羞ぢて顏をあかくすと、『まあ待つて』と柔かにとられた手を振り離して『妾帽子を脱りますから』

エレナは帽子の紐をほどいて側へ放り出し、外套を肩から滑らかして、鬢のみだれを搔き上げて、さて古びた長椅子の上に腰を下した。この間インサロフは、化石したやうに堅くなつて女のする樣子をながめて居た。

『御坐んなさいな』とエレナは目はうつむけたまゝ自分の傍の席へ呼んだが、インサロフはそこへは行かず、その下の床の上に坐つた。『一寸この手套を脱して下さいな』といつた聲は震へて居た。胸騒ぎのする樣子である。

彼はぎつ手套の釦を外して、それから片手を拔きかけて、半分てその下に露はれた白い纖美な手首に犇と唇を當てた。

エレナはビックリして此方の手で男を押し退けやうとしたが、却つてその

手まで接吻されかけたのをやッと引抜くと、男は首を仰向けた。その顔をいぶかるやうに覗き込むで、その方に俯向くやうにすると、二人の唇はひたと相觸れた。

かくして一瞬時はすぎた……女はッと振りもぎつて立上りさま、低い聲で『いやよ、いやよ』と云ひつゝ急に卓子の方へ歩み寄つた。『妾、此家の主婦なんてせう、だから妾に何も祕してはいけなくつてよ』とわざと悠然したさまを見せて、男の方に背を向けて、立ち乍ら『まあ大變な紙だこと、なあに此處にこんなにある手紙は？』

インサロフは眉を顰めて『その手紙？』と云ひつゝ立上り『あゝよんでもいゝです』

エレナは手紙を手に取ッて、引繰返して見たが『まあこんなにあつておまけに大變細かく書いてあるのね、妾もうすぐ行かなくつちやならないから……

……まあいゝわ、よその情人から來たのぢやないでせうね、え、……それにロシヤ語ぢやないんだわね』と薄葉の紙に目を移した。

インサロフはつと女の傍へすりよつて、やんぱりと抱きかゝへた。と女は急に此方を向いて華やかに微笑むでそのまゝ男の肩に凭掛ッた。

『この手紙はみんなブルガリヤから來たんで、彼地にゐる友人から僕に來くれといつて遣したんです』

『あの今直ぐ、彼地へ？』

『さうです、今直ぐ、今の中ならまだゆくひまがあるが、も少したつと行かれなくなつやしまいます』

とさくと女は矢庭に兩腕を綴め、頸にまいて『妾も一所に連れてつて下さるんでせうね、え』

男は女を胸に抱きしめて『いや有難い、勇ましい、よう云つて呉れました、

けれど考へると私のやうな宿なしの孤獨な人間が貴嬢を一所に引き摺りまはして苦勞させる、いかにも非道な、無法な所業ではないでせうか…それでどこへゆくかといへば？』

といふ口を女は押へて…

『叱？そんな事ばかし云つて、妾怒ッてよ、も二度と來やしないからいゝ、だッてそんなこと何もかもとうから二人で相談して決めてあるんぢやありませんか、妾あなたの妻ぢやなくッて、妻たる者が夫に別れて居られますか』

『婦女は戰爭に出られません』

『それはさうですけれど後に殘ッて居られない場合にはどうします、妾には一人殘ッては居られませんわ、』

『あゝエレナさん實に嬉しいです…ですがいゝですか、僕は二週間たゝぬ中に莫斯科を去らなくちやなりません、もうとても大學の講義などに出ては

居られません、卒業するなぞは猶の事です』

『まあさう』とエレナは遮ッつて『すぐ立つんですッて、貴君さへよけりや妾直ぐ、たッた今からあなたと御一緒に、いつまでもねッきりにしてもう家へなんか歸らなくッてもいゝわ、え、さうしませうか、今直ぐ立ッて』

インサロフはいよ〳〵情を籠めて女を固く腕に抱きしめて、『もし吾が爲す所にて正しからずは神よ吾を罪し給へ、神に誓つて永く二人は一體です』

『妾このまゝ居ませうか』

『否、あなた、それはいけません、今日はまあ自家へ歸つて何時でも行かれる準備をして置いて下さい、直ぐといつて運ぶ事件ぢやないんですから、まづ充分計畫を定めて置いて、それには金子も要るし旅行券といふ…』

『お金なら妾持つてゝよ』とエレナは言葉をはさんだ、『八十留計』

『さうですか、それ丈で足りるといふんぢやないが、あればなほ結構です』

『けれど妾もッと出來ますわ、借りて來るわ、母さんにさう云ッて貰へば・・・いゝや、母さんには云はない方がいゝかしら・・・・では時計を賣るわ・・・・耳環もあるし、腕環が二ッに・・・・それから紗が澤山あるから』

『いやエレナさん金子の方は左程困難ではないですが旅行券に困る、貴嬢の旅行券、それをまあどうします』

『さうね、どうしたらいゝでせう、旅行券てものはどうしても要用なもの？』

『どうしても要用です』

『では、あゝ妾思ひ付いた事があるわ』とエレナは嫣然して

『妾のまだ極子供の時分だつたけれど、・・・・自家の下女に逃亡したものがあつてね、でも捕まつたけれど放免されて長らく自家に居ましたの、それて家内中して可愛がつてやッたんだけれど、また逃亡しちまつてね、だけど妾其時は他日自分もこの女のやうに逃亡することがあらうとは思ひがけもしなか

つたわ、』

『エレナさんあなたそんな事は恥かしいとも思ひませんか』

『だッて、それや旅行券があつて行く方が好いには違ひないけれど、貰へないものなら・・・・』

『まあ一切後で、後て始末をつけますから、少しまつて下い、兎も角考へさして下さい。この上何事も二人で充分相談した上で取決めます、金子の方は私も持つてゐます』

エレナは額にかゝる後れ毛を搔き上げて、『ねえ、ヂミトリさん、二人一緒に旅行したらどんなに樂しいでせうねえ』

『さう、ですが行く先を考へると——』

『そんなら』とエレナは遮ッて『いつそ二人一緒に死ぬのも樂しいでせう、けれどねえ、何故死なゝくッちやならないでせう、どうかして生きてゐませ

う、妾達はまだ若い身體ですもの、貴郎御年齢はいくつでしたッけね、二十六？』

『え、二十六です、』

『それで妾はまだ二十歳だし、お互に前途は長いわ、でもいつかは妾を避けて逃げやうとなすッたわね、貴郎はブルガリヤ人だからロシヤの女なんかに愛されなくッても可かッたんだわ、どれ〳〵見てあげるわ、今でもまた逃げやうとしてゐるんぢやなくッて、でも妾もしか貴郎といふ人が出來なかつたら二人の身はどうなつたでせうねえ』

『エレナさん、何に迫られて私が行つてしまはうとしたか貴嬢御存じでせう』

『知ッてますわ、貴郎は妾を愛していらしッたんだけれど恐かつたのだわ、だけど貴郎だッて妾の愛して居ることを氣付かないわけはなかつたでせう』

『エレナさん、私は誓ッて虚僞は云ひません、私は全く知りませんでした、』

エレナは矢庭に一ッ男に接吻して『さうそれ丈聞いた丈でも妾貴郎を愛してよ、では妾御暇するわ』

『もッとゆつくり出來ないんですか』

『え、もうだめよ、まあかうして一人脱け出してくるにはどの位骨が折れたと思つて、十五分と思つたのが、もうとうに經ぎちやッたわ』と云ひつゝ外套を引かけ、帽子を冠ッて『ぢや貴郎明日の晩自宅へいらッしやらなくッて、いゝや明後日の方がいゝわ、どうせ氣づまりで面白かないけれど、でも仕方がないわ、全然逢はないよりはましでせう、ではさよならもう離して頂戴』

この時男は、これを名殘と女を抱きしめたが、『おや、ごらんなさいな、時計の鎖を破してしまつたわ、ま、なんて粗忽しいんだらうねえ、でも、まあいゝわ、あゝ却つていゝ事がある、これからこれを鍛冶屋へもつて行つて

直して貰はう、而して何處へ行つたときかれたら鍛冶屋へ行つて來ましたと言つて置かう』といつて戸の引手に手をかけたが、

『あゝ序に云はうと思つて忘れてゐたけれど、この二三日の内にクルナトウスキーさんから結婚を申込むで來る筈よ、けれど妾が何と答をするか、ほらこれだわ、』と云つて右の手の拇指を鼻の頭にあてがつて、他の四本の指を擴げて見せる。

『ぢや左樣なら、またお目に掛るわ、もう今度は路は分つてよ……てはをくれないやうにね』

エレナは戸を少しあけて耳をすましたがやがてインサロフの方をふり返つて、頭を下げてそのまゝ室を走り出た。

暫時インサロフは閉ぢた戸の前に立つたまゝ同じく耳をすましたが、階下の戸がバタリ音がして庭の方へしまると、長椅子の方へ進み寄つて坐つたまゝ、手で以て兩眼を抑へた。かやうな振舞をするのは此人にとつては、全く破天荒てこんなにして愛される程の己は人間かしらん、みんな夢ぢやないか知らん』と彼は考へた。

が、エレナの殘して行つた木犀花の香が暗いうすよごれた室の中にほのかになまめかしく匂つたので、其人の正しく爰に來た事を心にそれと確かめる。それと共に四邊の空氣はその若い聲のしらべや輕らかな若い足音や、さては若い女の溫かな快い香がみち滿ちてゐる樣に感じたのである。

二十三

インサロフは、尙確乎した報知を得る迄待つ事に決めて、まづ出發の準備にとりかゝつたが、さてそれにしてからが困難が甚しい。自分一人だけとしたらば何んの障礙があるのではない。たゞ旅行免狀をもらひさへすればいゝ

のだが、エレナはどうかしたものであらう。エレナの爲に正當の手續を履んで、免狀をうけるといふことはとても出來ない相談で、かといつて、二人こつそり結婚をすまして置いて、さて揃つて兩親の前に出るとする……『さうしたら御兩親も承知して出してくれるかもしれぬが、承知しなかつたらどうする。それでもかまはず行くはいゝが、告訴を起されたとしたら……もし……否々、何うにかして旅行免狀を握る工夫をつけるに越したことはない』と、彼は考へた。

彼はまづ、知合のさる代言人で、廢業したのか除名されたのか、表面營業はしてゐぬけれど、何によらず、秘密の事件には、年古く經驗を積むだ男に(勿論其人の名は云ふにも及ばないが)相談をかけて見る事にした。この紳士の住居といふのは、ちと遠くはなれてゐるので、インサロフは、一時間もガタ馬車に搖れてやつと着いたが、惡いときは惡いもので折あしく留守。で、すで

〳〵歸る。其途中、急に雨がひどく降出して骨まで透るほどびしよ濡になつた。その翌朝はひどく頭痛がしてならぬのを押して、再び其代言人を訪ねに行つた。代言人はじつと身を入れてきく(あひまには腹のふくれた水精の壺のついた箱から、嗅煙草を出したり、時々ぬすむ樣に狡猾らしいこれも嗅煙草の色をした眼で、客の顏をうかゞつてゐたが)とにかく、終局まですつかりきいてしまつた。所で、尙一層明確なる事實の說明をして頂きたいといつたが、インサロフの苦々しい顏付をして、此上細々しい事を述立てるのをこのまぬ樣子を見てとつて、冷然と『まあまたその中御出でなさい』と嗅煙草を一つ捻つて『ねえくだらぬ見得はやめにして一つざつくばらんにやつて頂かうぢやありませんか』と云つた。で獨語のやうに『旅行免狀なんてものはどうにでもなるものでさ、まあ旅へ出てごらうじろ、お前さんお松だらうがお竹だらうが誰が言立てゝさわぐもんぢやごわせんや』インサロフは嘔吐を

催しさうな心地になるのを我慢して、禮をのべ何れ一日二日のうちにまた來ると云ひ殘して立出でた。

其日の夕方、彼はスタホフ家を訪うた。アンナはいかにも懷かしげに迎入れて、全然見限つてしまつた怨言をまぜて、其ひどく蒼い顏をして居るのを看とがめて、氣分でも惡いかとたづねなどしてくれた。ニコライは始終一言も口をきかなかつたが、肅然ととり澄した中に、物珍らしげな眼付をして、じつとインサロフの容子を看視つてゐた。シユービンの素振は又至つて素氣ないものだ。が何よりも驚いたのはエレナの沈着き切つた容子で、もう前からインサロフの來るをまち設けつゝ、わざとかの日辻堂で剛れそめた時のまの服裝をしてゐたが、いかにもゆつたりと、愛想よく快活にはしやぎきつた樣子を見たばかりでは、この女の前途はすでに定まつてゐて、人しれぬ戀の歡喜に醉うて、自づと容貌も晴々と、擧動もうきうきと愛らしく見えるの

だとは誰に分らう。て、ゾオヤの手傳に茶の給仕や何やかや、くるくると立働いて、一人調子づいて口輕に喋つてゐる。實はシユービンが自分に目を注けてゐるのと、インサロフが狂言を書いても知らぬ振を裝ふ藝のうてぬ人と心得てゐるので、腹でも左程に付景氣をしてゐる氣味もあつたが、果して思ふ所にたがはず、シユービンは少時もエレナに目をはなさず、インサロフは始終元氣なく默りこむでゐる。エレナはまた大陽氣で、男のこんなに沈むでゐるのを叱りつけてやりたい程に思ふ。「あなた！」とエレナは突然大きな聲で「いつかの計畫は完成て」

「いつかの計畫とは」と男はまごついて問ひ返す。

「えゝぢや忘れておしまひなすつたの」と言つて笑つたが、その陽氣な笑聲の意味だけは彼にもよめたのだ。

「ほら、あの魯西亞人用のブルガリヤ語の讀本だわ」

『クエルブールド！　何をいやかる』とニコライは嗤るやうに云つた。ゾオはピアノに向ふ。エレナは輕く肩を聳して、さて目くばせでインサロフを戸口へ行けと敎へて、今度はそろ〳〵と指で二度卓子を叩き、男の顏を意味ありげにながめる。で、男の明後日また會はうといふ意味と悟つたらしい樣子を見て微笑する。インサロフはやがて立上つて、暇を告げやうとすると、何だかグラ〳〵として倒れさうになる。と其途端、クルナトウスキーがやつてきた。と見るよりニコライは椅子をとび上つて、右手を頭より高くさし上げて、一等秘書官の手を堅く握りしめる。インサロフは歸りかけてまた立止り、戀の敵の人の人物風采を觀察しやうとしたが、エレナは頭を搖つて見せる。主人たるニコライも二人を紹介する必要があるとも思つて居らぬので、勿々にしてエレナと最後の一瞥を交したまゝ出て去つた。シユービンはじつと考へこむて居たが、癒て身を起したと思ふとクルナトウスキーと何か乾燥なわけも解らぬ法律問題

を論じあつて〳〵火花を散らして居た。

其夜、インサロフは終夜睡られず、翌朝起きて見ると、氣分の普通ならぬを覺えた。が、とにかく起出て文書の整理や、書簡の整理にとりかゝつたが、頭は重く亂れてゐる。午餐頃になると、ひどく熱が出てかつかとやけるやうで何も喰べる氣にならない。熱は夕方になつてます〳〵昂つて、全身の節々がチク〳〵痛む。頭は岑々と締付けられる樣だ。インサロフはこの前エレナが來て坐つた長椅子に座つた。『あゝひどい目にあつたものだ、何と思つてゐれはあんな古狸の所へなんか行く氣になつたらうか』と考へる。で頻りと眠らう〳〵とつとめるが・・もういつの間にか劇烈な熱病にとつつかれてしまつたのだ。血は沸え返つてとりとめもない妄想が頭の中を驅け廻る。やがては殆んど人事不省のやうになる。でたゝき倒された死骸のやうになつて、仰向にひつくりかへつてゐたが、急に何やら頭の上で忍び音に呼き笑ふ聲がする

ので、無理に眼を開けて見ると、まだ燃えのこつた蠟燭の火光が閃乎と小刀で刺す樣に眼を射る。訝？　あれは何だ！　眼の前に例の老代言人が、東洋風の絹服に絹の帶をしめて、總て夜前見た通りの風をして居る。『お竹だらうがお松だらうが』と齒の拔けた口の中で爺さんは呟く。インサロフはじつと眼を据ゑて睨めつけると、爺さん横へも空へもずん〳〵ひろがつて、もう人てはない。木だ…　インサロフはその蜿り合つた枝を傳はつて這はねばならぬ。ぶらさがつたと思ふと、足をさらはれて落ちて、尖つた石で胸を打つ。石の上にお竹が蹲つて『菓子はよろしか、菓子はよろしか』と嗚咽つてゐる。と、そこに、それは〳〵大きな血の池がある。彼方には劍の林がキラ〳〵と目も眩むばかりだ。エレナー！　と一聲叫ぶと、萬象一時に濛々として、たゞ一色の紅の中に消えてしまふ。

二十四

『只今誰か存じませぬが、鏘懸師か何かそんな風の男が階下へ參りまして、御目にかゝりたいと申してますが』と翌日の夕方ベルセネフの僕は取次いだ。この僕、自ら持すること頗る謹嚴、何事によらず主人に對し控目〳〵と心がけてゐるのを誇りとしてゐる。

『お入んなさいといへ』とベルセネフは命じる。

『いかけや』さんは這入つて來た。見ると見覺のある仕立屋、インサロフの下宿してゐる宿の亭主だ。

『何か用かい』

『〳〵エ實は貴宅へあがりましたのは』と仕立屋は、片足を交る〳〵しきりなしに前後に動かしながら、右の手を振つて三本の指で前垂の端をいぢくりま

はし乍ら『下宿の方がひどくかう鹽梅が御悪い樣子だもんだから』

『誰れ？　インサロフがかね』

『さうですよ、下宿の方ですよ、何でも昨日の朝まではしゃんとしてゐたんですがね、夕方になると、頻りと何かのみたいと仰有るんで、嫁が水をもつてあげたんで、それから夜になると譫言がしきりと壁越にきこえましたが、今朝になつて見ると、丸太ン棒のやうになつて、口も利けずに寐てゐるぢやありませんか、何でも大變な熱でやれ〳〵こいつはとても助からねえ、何事をおいても、早く警察へ屆けざなるめいと思ひました、何分、それあの通り獨身の方ですからな、すると嫁の奴のいふには、お前さん、あのそれ田舍で一緒の宿にゐらしつたあの方の許へ行くがいゝぢやないか、多分あの方ならあゝしろかうしろと指圖もして下さらうし、御自分も來て下さるかも知れないからとこう申しますんで、旦那の所へ參りましたが、何分どうにもかうに

も始末が……』

ベルセネフはきゝもあへず、帽子を引奪くる樣に被つて、若干かの錢を亭主の手に握らしたまゝ、亭主と一緒にインサロフの宿へ大急でかけつけた。

インサロフは、他所行の服裝のまゝで、長椅子の上に倒れて、人事不省の狀態で居た。顏付は淺ましく變り果てゝ居る。ベルセネフは、直ちに宿の主人夫婦に、何よりもまづ衣服をぬがせ寐臺にうつす樣に吟附けて置いて、自分は外にとび出して、醫師を連れて來る。醫師は水蛭をつけ芥子を貼り甘汞を處方して、血をとらした。

『餘程險呑な病體でせうか』とベルセネフはきいた。

『左樣頭る險呑ですな、肺にひどく炎衝を起して居て、充分肺炎の症候は見えるし、或は腦までも犯されてゐるかもしれんが、患者はまだ若いから持つたのですが、その若い力にも少しもう抵抗しかねる所があるかと思ふてす、

何分少し手後れになつてゐますからな、けれど科學の力に能ふだけの事はやつて見るつもりです』

醫師はまだ年少氣鋭、科學力を信じてゐるのだ。ベルセネフは、其夜は一晩こゝで明かした。下宿の主人夫婦は深切者らしく、かうしてくれといつてやればすぐとんで來て世話をしてくれる。その中代診がやつて來て、療治を施して行つた。

翌朝になつて、インサロフは暫時我に返つて、ベルセネフの顏を認めたが『ぢや僕は病氣したんだね』と呟いて、重症の人に特別な惘乎沈着かぬ眼付でキヨト〳〵と四邊を見まはして、再び人事不省に陷つた。

ベルセネフは自宅に歸り、衣服を着かへ二三冊の本を包んで、再びインサロフの宿へ立戻つた。せめて、爰しばらくは、附添つて看護してやらうと決心したので。て、インサロフの寐臺に帷帳を張つて、見えぬ樣にし、長椅子

の傍にちよんぼりと自分の席を設けた。日は遲々として物わびしく暮れてゆく。この間ベルセネフは、食事の時の外は室もはなれなかつた。夕方になると蠟燭を點して、覆を掛けて靜かに書をよみ始める。森として四邊は靜まり返つた。折々隣壁に宿の者が祕々と語らふこゑがきこえる。次いで欠伸の音がして、溜息が洩れる。誰か嚏をして、低聲に叱られてゐる。帷帳の後からは、病人の荒いとぎれ〳〵な呼吸の音がして、合間には弱々しい唸り聲や苦しさうに寐がへりを打つ音がする……不思議な感想がベルセネフの胸に沸立つた。自分が今ゐる室の主の生命は、一髮の間にかゝつてゐる。その人は現在あのエレナが愛してゐる……自分はよく知つてゐる……彼はあの夜シユービンが跡を追つて來てエレナは自分を——ベルセネフを愛してゐるといつた事を憶出した。然るに今は……『今はどうしやう』と彼は自らとふて見る。『エレナに此病氣の事を知らしたものだらうか、も少し待つたほうがい

、かしらん、いつかの話よりまた數倍惡い報知だらうからな、だが不思議さ、おれはこの二人の仲の媒介者にまでならなくてはならんのだ』結局、今少時待つ方がいゝと決心した。彼の眼は卓子の上に堆かく積んだ紙片の上に注いだ。『此男は果してあの空想を實現するかしらん、結局何のうる所もなくして終るんぢやなからうか』

と考へても見る。彼は青春志を抱いて、中途に死に襲はれて居る友のいたましい運命に泣いた揚句、誓つて之を救はうと思つた。その夜は誠に穩かならぬ一夜であつた。病人は恍惚と夢現の境をさまよつてゐる。幾度かベルセネフは席を離れて、瓜立足して寐臺へ近寄り、友のとりとめらぬ譫言に耳をすまして、情ない心持になる。たゞ一度インサロフは、急に物凄いほど明晰と『そんな事が出來るもんか、あの女にそんな事をさすものか』といつた。ベルセネフは愕然としてインサロフの顏を見た。面はやつれて死人のやうにな

つてゐるが、嚴然として眉一つ動かず、手は胸の上に力なく載つてゐる。『そんな事が出來るもんか』とかすれて聞きとれぬ程の聲で、また反復した。

其翌朝、醫師はまた見舞に來て、首を傾けて、何か新しい處方を書いて、『峠といふところへはまだ仲々です』と帽をとりあげ乍らかういつて歸る。『それでその峠をこしたあとは』とベルシネフは訊ねた。

『さあそのあとは、二つの一つですまあ一かバチと云ふとこでせう』

醫師は去つた。ベルセネフは霎時街上に出て散歩した。むつとする病室に立て籠められて居たので、新鮮しい空氣が何となく戀しくなつたのだ。歸つて彼はまた書物に對つた。ラウメルはもうとうに終へて、此頃ではグロートの研究にかゝつてゐる。と、突然戸がギーと靜かに開いて例によつてぼて〳〵した帕帨を頸に卷き付けた宿の娘がそつと室の中へ首を出して、

『あのう妾に御錢を呉れた御嬢さんが來てよ』と低聲で云ふ。

と思ふと突如として娘の方は引込むだ。その途端、エレナが室に這入つて來た。

ベルセネフは、跳ね飛ばされたものゝ樣にとび上る。エレナは、振向もせず聲も立てない。が、瞬間に一切を悟り盡したものゝやうに見える。顏は見る間に悽いほど眞蒼になつて、つか〳〵と帷帳のかげへすゝみ寄つて、寐臺の上に生死もしらず突伏した男の姿を見ると、兩手を堅く握りしめたまゝ、石のやうになつて突立つた。が急にその身を病人の上になげかけやうとする。ベルセネフは馳けよつて引とめた。『何を貴方はなさるんです』と叫んだ聲は低く慓へて居る。重ねて『貴女は此男を殺すおつもりですか』

エレナはよろ〳〵とよろけさうになつたのを、ベルセネフは靜かに支へて、長椅子に連れかへつて、自分の傍に坐らした。エレナはベルセネフの顏

を見た。じつと目を据ゑて男の腹の底まで讀み解かさうとするもの〳〵やうにながめつめて、ついて床の上に眼をうつした。

『この人は死ぬてせうね』といつた聲はいかにも冷々と落着き返つてゐたのでベルセネフは悸とした。

『エ、何ですつて、何を貴女は仰有るんです、インサロフは病氣です、まづ重い方でせう、けれど誓つて助けるつもりでかゝつてゐるのです』

『夢中なんですね』とまた同じとりつくろつた靜かな調子でエレナが云ふ。

『え、今の所では夢中です、かういふ病氣の初期には普通の事ですから、けれど何でもない、ほんとに何でもない事なんです、まあ水でも飲つて』

『もしあの人が死んだら妾も一緒に死にます』といつまでいつても同じ冷やかな調子である。其の途端インサロフはかすかに唸つた。と、エレナはブルッと身を震はして、惘然手を額にやつて、やがて帽子の紐を解きはじめ

た。

『何をなさる』とベルセネフは問ふ。エレナは何の返事もない。

『何を爲さるんです』と彼は重ねて問うた。

『妾愛についてゐます』

『え、愛について何時までもですか』

『それはわかりません、畫中ですか夜までゐるかいつまでもゐるか――妾には解りません』

『まあ後生です、沈着いて下さい、勿論私は貴孃が愛へ御入來にならうとは夢にも思かけてはゐませんでした、けれど、貴女だつて一寸のおつもりていらしつたにちがいないと思ふですか、貴孃が見えなければ貴家で御心配なさるでせう』

『そんならどうといふんですの』

『皆さんしてさがすでせう――さがせば見つかります』

『見つかりやどうします』

『エレナさんいゝですか、インサロフは今貴女を保護する事は出來ないですぞ』

エレナはぐつたり首を垂れて物思に沈むで居る樣子。手巾を唇に押しあてゝ居る。と急に、全身が引きちぎれるかと思はれるほどはげしく晞泣が込み上げて來る。て顏を長椅子に埋めて、こみ上げてくる悲しみを抑へやうとするが、どうしても抑へきれない。身體はぴくり〳〵震へて、まるで掌の中に捕はれた小鳥の樣だ。

『エレナさん後生ですから』とベルセネフはくどいやうに繰り返す。と突然

『誰だ、何だ』とインサロフの呟く聲がした。

エレナはびくりとした。ベルセネフは釘付された樣に立すくむ、少時してベルセネフは寐臺にすゝみ寄つた。依然インサロフの頭は力なく枕の上にのつて居て、その眼は堅くとぢて居る。

『うつゝなんですね』とエレナは呟いた。

『さうらしいです、けれども何でもありません、何時もかうなんですから、ことに……』

『いつ病氣になつたんでせう』とエレナは遮る。

『一昨日です、昨日から私は來てるんですが、私にお任かせなさい、私は傍をはなれやしません、出來る限りの手當は盡しますから、もしもの事があれば直ぐ御知らせ申します』

『妾がゐなけりやこの人は死ぬわ』と少女はおろ〳〵聲で叫んで手をふつた。

『うけあつて私は毎日容體をあなたに知らせます、もし少しでも危篤な樣てしたら……』

『すぐ妾の許へ人をよこすつて約束して下さい。晝間でも夜夜中でもかまやしません、すぐ手紙をよこして下さい、もう他の事なんかどうなつたつて、え、わかつて、きつと御約束してよ』

『神に誓つて御約束します』

『誓言して下さい』

『誓います』

少女は矢庭に男の手を引攫んで、對手の釋からうとするひまもなく、情をこめて唇に押しあてた。

『エレナさん、ど、どうなさるんです』と男は吶る。

『否、否、そんな事をする必要はない』とインサロフはとぎれ〳〵に呟いて苦しげに太息した。

エレナは寐臺の方へ進み寄つて、手巾をしかと唇にくはへて、病人の顏をじいつと見入つた。涙は靜かに頰を傳つて流れる。

『エレナさん』とベルセネフは呼いて、『インサロフがヒョッとして我に返つて、あなたを認めんとも限らんです、すりや病氣にさはらんものでもない、それにいつ何時醫師が見舞にくるかわかりませんから』

エレナは長椅子の上の帽子をとりあげて、頭にのせて默つたまゝ立つて、便なげな悲しい眼付をしてうつとり室を見廻はした。前に來た時の事を思ひ出してゐるらしい。

『妾どうしても行かれないわ』と呟く。

ベルセネフはエレナの手を握つて早口に

『まあしつかりして下さい、心配なさらんてもあなたは私にあの男の看護を任したんでせう、今晩きつとあなたの許へ行きますから』

エレナはやさしげに男の顏を見て『あゝほんとにうれしい』と跡はおろ〳〵聲になつて、とつかはと室を出た。

ベルセネフは戸に凭りかゝつた。悲しい、わびしい、感想がそれに何となく慰められるやうな思も交つて、ひし〳〵と胸に迫る。『あゝほんとにうれしいのか』とひとり繰り返して肩を聳した。『誰だい』とインサロフはかすかにきく。ベルセネフは寐臺にかけ寄つた。『ジミトリ君僕だよ、何か欲しいか。どんな氣分だい』

『君ひとりか』と病人はきいた。

『さうさ』

『あの女は』

『あの女とは誰さ』とベルセネフは狐狽して問ひ返す。

インサロフは返事もしないで、たゞ『ミニョネット』と呟いたかと思ふと、

又堅く眼をとぢた。

二十五

それから八日の間、インサロフは生死の境に逍つて居た。醫師は絶間なしに見舞に來て、若い醫師の常として重病を手がけるのが樂さに心を盡して療治して呉る。シユービンはインサロフが餘程の重體といふ事を聞て度々樣子を聞に來た。同國の者も大分見舞に來て、その中にはいつか不意にコーントソフの假寓を訪ねて非常にベルセネフを惑はした二人の妙な男も來た。皆どの人も眞實心痛の色を見せて、中にはベルセネフに代ツて看護しやうと云ひ出したものもあつたけれど、ベルセネフは飽くまでエレナとの約束を重んじて承知しなかつた。で日毎にかゝさずエレナを訪ねて私かに或ひは口上で、或は手紙にして、病氣の模樣を細々と告げ知らした。エレナはいかほどか胸を

慄かしてベルセネフの來るのを待ち受けて、さて來れば一言も洩らすまじと耳をすまして聞く。なほ足らなくて根問ひ葉問ひする。唯の一度でも好いから、自分で行つてインサロフに逢ひ度くて〳〵ならぬのであるが、ベルセネフは此頃インサロフには客の絶えぬ事を說いてわづかに思ひ止まらせた。

初めて男の病氣といふ事を知つた時は、殆んど倒れさうになつて、家に歸ると直ぐ室に閉ぢ籠つてしまつたが午餐に呼はれて階下へゆくと、全然死人のやうな色艶をして居たので、母親は驚いて醫師を呼びに遣らうとしたのを、やつと押し止めた位。が、それてもどうにか斯うにか氣分を平らかにする事を得たのだ。

『もしあの人が死んだら妾だつて生きちや居ない』と絶えず思ひつゞけて來ると、氣に落着が出來て、平氣な風を裝ふ丈の餘裕が出來る。それに仕合な事には誰もあまりエレナの邪魔をする者はない。アンナは風邪をひいて、そ

の養生にかまけてゐる。シユービンは狂人のやうになつて仕事をして居る。ゾオヤは物の哀にとつつかれて、ヴエルテルに憂き身を窶して居る。ニコライは例の所謂『書生』が頻りと訪ねて來るので、氣を惡くして居る。(ペルセネフの事)其上年來の『宿願』たるクルナトウスキーとの關係が段々まとまらなくなるので、不興な顏をして居る。實務家の一等祕書官はまだ大事をとつて口をきらずに居る。エレナはペルセネフにむかつて一度も禮を云ッた事もない。世間には世話になつても禮がいかにも云ひ辛いといふことが隨分あるものだ。

たゞ一度……四日目である。インサロフの前夜の樣子が頗る惡い、醫師の警告もあつた、その翌日であつたが……その日始めてエレナはいつかの約束をもち出して見た。て、『ぢや妾行きませう』といつて立上ッて、支度をすると『まあ明日までせめて待ッて下さい』とペルセネフはとゞめた。兎に角、其夕方インサロフはやゝ懈り氣味になつた。

この樣な不安な狀態の中に八日は經ぎた。エレナは表面は沈着いて、とり亂した風も見せぬが、何も食べ物が喉に入らず、夜もおち〳〵眠られない。身體の關節がづき〳〵痛むて、何か乾いた熱い煙のやうなものが頭の中に一杯籠つてゐる樣だ。『お孃さんは蠟燭のやうに段々とろけて細くおなんなさるよ』と小間使は噂しあつた位。

終に九日目に峠はすぎた。エレナは客間でアンナの傍に坐ッて、自分でも何を讀むとも解らず、莫斯科ガゼットを母に讀むてきかして居たが、この時ペルセネフがやッて來た。と、エレナは顏を上げて、我にもあらずちらと見て鋭い物おぢする樣な、さぐる樣な眼差で迎へたが、一目にペルセネフの吉報を覺した事をさとッた。で莞爾とすると對手も輕くうなづく。エレナは急いで立上ッて迎へた。

『到頭氣が付きました』とペルセネフは低聲に呼いて『もう助かりました、

一週間かそこいらですつかりと快復るてせう』

エレナは、何か頭上に振りかざゝれた棒でも拂ふやうに、腕をさし伸したまゝ、何の返事も出ない。たゞ唇はワナ〳〵と震へて、兩頬は見る間にばつと紅味がさした。ベルセネフはその中アンナの傍へよつて、談話を始める。その間にエレナは室に戻つて跪いて、長く神に祈ッた。歡喜と感謝の涙がはら〳〵と頬を流れる。と急にがつかり疲勞を覺えて、枕につゝ伏したまゝ低聲に『アンドレイさんすみません』と呟いて、頬も睫毛もぬらしたまゝ、直ぐにぐつすり寢入ッた。泣くも眠るも久しい〳〵程の事である。

二十六

ベルセネフの豫言は、わづかに一部分事實となつたばかりで、インサロフの病氣は危險だけは去つたものゝ、氣力の回復は頗る遲々として居るので

醫師は全身の機能が根本から障害を受けてゐると云つて居る。そんな狀態ではあつたが、床は離れて室の中位は歩けるやうになつた。て、ベルセネフも一まづ自分の宿に歸つたが、それでも毎日かゝさず病友を見舞ひ、エレナにも前のやうに毎日その狀態を知らせることを怠らなかつた。

インサロフは流石にエレナに手紙を送ることを憚つてたゞベルセネフと會談の折にそれとなくその人の上を云ひ出す位にして居た。がベルセネフは、態と素知らぬさまて自分のスタホフ家を訪ねた話の序でに、エレナの心痛も一時はひどかつたけれど今ては沈着いて居ると云ふ事をどうかしても告げ知らせやうとした。エレナもまた一言も書き送らない。それと云ふのも心中密かに思ひ定めたことがあるので。

と、或日ベルセネフは嬉しさうな面をして、エレナの許へやつて來て、インサロフへも醫師からカツレツを食べてもいゝといふ允許が出たから、多分

直さに外に出歩くことが出來るだらうと語つた。エレナは伏目に床を見つめてうつとりと何か物思にふける樣子であつたが、

『妾何を言はうと思つてるかあたつて』

ベルセネフは當惑らしい顏をしたが、エレナの心持はよめてゐるので、外方を向いて『多分あの男にあいたいと仰有りたいんでせう』と答へる。

エレナはほつと紅くなつて、聞きとれぬほどの聲で『えゝ』といつた。

『さうですか、何んですその位なこと、貴女には何でもない事だらうぢやありませんか』

かう答へながらも、彼の胸は劇しき鼓動を覺えた。

『あなたのおつもりでは妾が現にもう行つたぢやないかつて……、でも妾何だか……だつて此頃は大抵來客か來てゐるつてんでせう』

『その位な事はどうにでもなりますさ』とベルセネフはなほも顏を背向けた

まゝて『勿論私の口から貴嬢が來るからといふ事は言ひ難いが、友人の病氣を心配して見舞の手紙を遣るに誰がわるいといふもんですか、ちつとも差支はないはづです、約束をして――つまり何時何日行くからとしらせてをけばいせていう』

『そんな事ばつかし云つて』とエレナは低聲に呟く。

『手紙を書いて私にお渡しなさい持つて行つてあげますから』

『それには及びませんわ、ですが妾御願がありますの、ねえ貴郎、怒つちやいやよ、――貴郎明日あの人の所へ行かずにゐて下さいな』

ベルセネフは唇を嚙むだが、『あゝさうですか、わかりました、よろしいよろしいです』

といつてあと二言三言勿痒に辭し去つた。

『これが却つてよからう、さうだ却つてよからう』と宿にもどる途中いろい

ろな思が心の中に往來する。『おれは何も新しいことを知つたのではない、いやその方が却つてよからう、何を苦んでいつまでか他人のものときまつたものに未練を殘してゐるのだ。おれはちつども悔むことはない、おれは良心の命ずるまゝをやつたまでだけれど、今はもう萬事休した。二人の爲たいまゝにしておく計りだ、死んだ親父がよく云つて聞かした『これ貴樣もおれも貴族でもない、運命の愛子でもない、かといつて運命に殉する者でもない——二人はたゞ働いて働いて働きぬく、これだけの人間なんだ、まあ革の前垂でもしめて薄暗い工場の中で仕事板の前に坐るつもりでゐろ、太陽の光は他所の人間の上にばかり照るものと思へ、こちとらの生涯はそりや隨分苦しからう、つまらなからう、がそれ相應に樂しみもあれば報酬もあらう』といつたが、尤もだと思ふこんなことまでも考へて見る。其翌朝インサロフは郵便で次のやうな短い手紙をうけとつた。

『妾今日きつと行きますからそのつもりで都合して一人でゐるやうにして下さい、A、Pは食事前に行かない筈です。　エレナより』

二十七

インサロフはエレナの手紙を讀むと直ぐ樣室を片付け始め、宿の主婦に藥瓶を退けさせ、寢衣をぬいで上衣を引纏うた。一つは身體の弱つてゐるのと一つは氣が浮立つてゐるので、頭は眩々として、心臟は劇しく鼓動する。膝をブル〳〵震はせながら、長椅子の上に横になつて、時計を出して時間を見て獨りで呟いた。『まだ十二時に十五分前だ、十二時前に來る氣遣はないからこの十五分間は何か外の事を考へる樣にしなければならん、とても十二時より早くは來られまい』と、いふうち戸が開いて。エレナがうすい絹服を着て、青白い顏ながら、若々しく元氣らしい樣子で這入つて來て、微かに嬉しさう

な聲を出して、男の胸に身を投げかけ

『まあ、あなた、よく生きてゐて下すつたわねえ』と、幾度も同じ事を云つて、男の顔をやわらかになでる。男はまじ〳〵と坐つたまゝ、身近くひしと寄り添つた女の香に醉うて、ほつとして息も止るばかりになつた。

エレナは男の肩に首を倚せて、戀する女の眼にばかり獨輝く、人をそゝるやうなやさしい眼差をして、じつとこの顔に睇入つたが、と急にその顔はくもつて來る。

『まあほんとに貴郎は痩せたねえ』といつて、襟に手をかけて『そしてまあこの髯の生えたこと』

『だが貴孃もやせましたね』と、女の手を唇にあてゝ男は答へる。

エレナは和りして髪の毛をゆすり乍ら、『莫迦なこと仰有い』と大きな聲で云ふ。『一寸ごらんなさい、妾こんなに丈夫になつたわ、先日辻堂であつたあ

のやうに嵐はもうすぎてしまつたのよ、隨分あれたけれどもう凪いでしまつたわ、これから二人は幸福になるのよ』

男はたゞ微笑して之に答へた。

『ねえ、ヂミトリさん、お互に散々可厭な日を送つたわねえ、何と云ふ情ないーーかうやつて二人愛しあつてゐる同志が、どうして一人のこつて生きてゐられるでせう、妾いつもアンドレイさんが今日は何ていつてるか前からちやんと知つてゐたのよ、ほんとにさうだつたのよ、妾の呼吸とあなたの呼吸と、一緒にさしひきするんですもの、あゝほんとによく癒つ下すつたわねえ』

男は何と語を出すべきかを知らなかつた、かたゞ女の足下に身を伏せてもしまひたく感じた。

額にかゝる毛をかき上げ〳〵女はなほ言葉をつゞける。

『妾はそのときまた氣がついたわ、妾始終ひまだもんだからいろんな事を考

へたのよ、人と云ふものはもう！〜非常に不幸な境遇にゐると、身のまはりのものが何によらず急に馬鹿らしいほど目にとまるものなのね、嘘だつて仰有るか知れないけれど、ほんの蠅一匹でさへぼんやり見つめてゐるうち、ぴりとして血が氷るやうになることがあつてよ、けれどもうそんな事は過ぎ去つたわ、みんな過去だわ、ねえ、さうぢやなくつて？　これから未來はもう光明がかがやくばかりだわ、ねさうぢやありませんか』

『僕の光明が輝くやうになつたもみんなあなたがあるからです』とインサロフはやつと答へた。

『妾だつて貴郎があるからだわ、けどねえ、貴郎記憶えてゐらつして、いつか妾この室で、この前來た時ぢやないのよ、ええこの前の時ぢやないの』と

エレナは反覆して吾しらず身をふるはせた。『ねえ、二人話してゐるうちに、なぜだか知らないけれど、死ぬ事の話しなんかしましたわねえ、その時は妾

目の前に死が迫つてゐるやうなんて、ちッとも思やあしなかつたんだわ、てすがあなたほんとに快くなつたんですか』

『えゝ漸次快くなる方で、まづ大抵癒つたんです』

『貴郎はもう回復つたんだわ、死になんかしやしないわ、あゝ妾なんてられしいんだらう』

暫時言語が杜絶れる。

『エレナさん』と男は不意に呼んだ。

『なあに』

『貴嬢ほんとにこの私の病氣は天罰が下つたんだとは思ひませんか』

エレナは眞顏になつて、男の顏を見たが、

『ほんとに妾ももしかするとそんな事ぢやないかと云ふ樣な考も起りましたけれどね、よく考へて見ると、何もそんな罰を受ける筈がない、と思ひます

わ、妾まあ何の義務を懈つたでせう、何人に對して罪惡を犯したでせう、妾の良心は他人とはちがつてゐるかもしれないけれど、妾を責めやしません――まあことによつたら、妾貴郎に對しては罪惡を犯してゐるかもしれないわね、妾良郎の防禦をしたり、貴郎を抑制したり』

『え、貴嬢が私を防禦した！　そんなことが、二人は一緒に行くんです』

『えゝ、ほんとに二人は一緒に行くのよ、妾貴郎と御一緒に行くんだわ、それが妾の義務よ、妾は貴郎を愛してる……この外に妾の義務は何にもないわ』

『まあ、エレナさん、貴嬢の仰有る一語々々に私は桎梏を感じます』と男は呟いた。それをエレナは遮つて、

『桎梏なんて何を仰有るの？　お互に自由の人間ではありませんか、あゝさうだ』とエレナは物忌はしげに床の上に眼をやつて、『妾、この二三週間の間

に、從來思ひも寄らずに居た事を澤山經驗しました、いつかぢう、もしか誰か妾にあなたは立派な淑女ともあらう身が、かりにも種々な僞りの口實をかまへて、家を出てどこへ行くかと思へば、若い獨身の男の下宿を訪ねる、とかういつたら妾はどんなにか腹を立てゝ侮辱された樣に感じたでせう、しかもさう云はれた事はみんな事實になつて、さういはれても妾、腹も立てられないんだわ、ほんとうに』

と云つてインサロフの方に顏を向ける。

其時男は、なつかしい眼付をして、女の顏を見たので、女は靜に髮にさはつてる手を落して男の眼を遮つた。

『ヂミトリさん！』とエレナはまた口を切つて『あの時妾が貴君に遇ひに來たのを御存じなくつて？　ほら、あの床の上にね、何だかまるで死んだやうになつて、人事不省で貴君が居らしたのよ、あゝ、厭だ、思つてもゾッとするわ』

『え、貴君が此處へ居らしたんですつて？』

『えゝ、さうよ』

インサロフは周章氣味になつて『てはベルセネフも居たんですか』

エレナは傾づいた。と、インサロフはいきなりエレナの方へ伸しかゝるやうにして

『何ですつて、エレナさん』と小聲で『僕もう合す顔がありません』

『何をおつしやるの。アンドレイさんはあんなに善い方ではありませんか。妾ちつともあの人の前で恥かしくなんかないわ。さうでせう、何も恥づる事なんかないですもの。妾の身は貴君のものだつて事を世界中へ明さうとさへしてる間際ぢやなくつて。それにアンドレイさんは妾同胞のやうにまで信じてる人なんたもの』

と女は低聲に答へる。

インサロフは女の手を溫かに握りしめて、『いやロシヤの人の氣象は實に高潔です、それでゐながら彼の男は夜となく晝となく私に付添つて看護してくれました。そしてまた貴嬢は、貴嬢に至つては私のため天使です、何一言の責むる事もなく、一瞬の躊躇することもなく――すべて私の爲、私の爲ばかりです』

『さうよ、さうよ、みんな貴郎のためよ、貴郎を愛してゐるからだわ、ねえ、ヂミトリさん、まあ妙だわねえ、あの妾先にいつたことがあるかとも思ふけれど、でもいゝわ、反復して云ふの、妾は嬉しいけれど、それに貴郎だつてこれをきくのは厭ぢやないでせう――是は初めて妾あなたに逢つたとき……』

『如何しました、貴嬢眼の中に涙をためて？』

『妾？　あの涙を？』と手巾で眼を拭いて、

『まあ、莫迦々々しい！　人は餘りうれしいと嬉し涙が零れるつて云ふわ、

妾云はうとした事があるんだわ、それ妾初めて貴郎に御目にかゝつた時は、妾、何にも別に貴郎偉い人とも思ひませんでしたのよ、これは眞實の話よ、初めて逢つた時は、彼のシユービンの方がよつほど好ましいと思つてよ、是れからアンドレイさんは――さうねえ、一時は此人こそと考へたこともあつたけれど、さて貴郎にはまるつきり此麼事はなくてゐて……後になつて後になつて、急に……』

『もう澤山』と急忙しくインサロフは休めて、起上らうとしたが、ひよろ〳〵として長椅子にぐたりと倒れた。

『何うなすつて』と懐しげにエレナはたづねる。

『何でもない――何でもないです、私はまだ弱つてゐる所があるんです、是丈の嬉しさを逼まらせる力がないんです』

『ぢやじつとして坐つていらつしやいよ、ちつとも身體を動かしては不可なくつてよ、落着いてゐるんですよ』と指を振上げて脅やかす眞似をして、『それにまあ、何だつて寢衣を脱いだの、今から紳士になり澄ますのは早過ぎるわ、まあお坐んなさいよ、妾お話してきかせるから、貴郎は只聞いてさへゐればいゝの、病氣揚句に澤山物を云ふのはよくないんだわ』

それからエレナはシユービンの事、クルナトフスキイの事、この二週間の間に何やかや自分の爲た事、戰爭のおつつけ起りさうな事、それが愈々始まるとなれば即座に二人はロシヤを立去る用意をしなければならぬ事等を、語りつゞけて、その間男の傍に引添うて其肩にたれてゐた。……かく女の語る間、男は青くなり紅くなりして聞いてゐたが、幾度か口を噤ませやうとした末、終に女を振放して怪しく絞るやうな聲で、『エレナさん行つて下さい後れたから歸つて下さい』と叫んだ。

『何ですつて』と喫驚して、エレナは叫んで、『お氣分が悪いの？』と重ねて問ふ。

『いやなに……氣分は何ともないんです、……けれど後生だ、行つて下さい』

『何の事だか、妾わからないわ、妾を追出さうつて仰有るの……おや、何をあなた爲さらうつてのよ』と、インサロフが長椅子の上から背を屈めて自分の足に唇を押しあてるので、エレナは急に叫んだ。

『そんなことなすつて、いやですよ、あなた……』

インサロフは身を起した。『ぢやぢや行つて下さいね、エレナさん、私は病氣に罹つた當座すぐに夢中になりはしませんでした。自分でも墓穴の緣まで來たと思つたが、そうです、そして熱の烈しい間、夢心地になつて居た間、始終死がさし迫つてゐるんです、人生と別を告げなければならぬ、貴嬢にも何にもかにも別を告げなければならぬ、もはや一點の希望もない事と思つて覺悟したのでした……然るに忽然としてまた復活した、暗の後に光を得た、貴嬢の――貴嬢――かうやつて、自分の傍に來て――貴嬢の聲、貴嬢の呼吸――私はとても耐へきれません、物狂はしい程貴嬢が慕はしくなつて、貴嬢が私の妻と云つて下さつたのを聞くと、もう自分を抑へる事が出來なくなつて、何とも答が出來なくなつたのです、だからもう行つて下さい、え、

エレナさん、行つて下さい』

『ヂミトリさん』とエレナは男の胸に頭を埋めながら、靜かに私話いた。

漸くして男の心も解けたのだ。

『エレナさん』とインサロフは言葉とつゞける、『私がこれほど貴嬢を愛してゐるがおわかりでせう、貴嬢の爲に私の命はいつても捧げます……何だつて今頃、私がこんなに弱り切つて、自分で自分を制することの出來ない、云はゞ身體中の血が胸の中で煮え繰り返つてゐるやうな時に、わざ〳〵訪ねて來たんです……貴嬢は私の戀人です、さようなら……貴嬢は私を愛してゐる……』

『ヂミトリさん』と女は再び叫んだまゝ眞紅になつて、尙もぴつたり男の胸に寄添ふ。

『エレナさん、後生です、さあ行つて下さい――私は死にさうです……私とても此の劇しい情に克つことは出來ません――私の心は全く貴嬢の方へ行つてしまつて――それですから既に一度死が殆ど二人を引離さうとしましたが――それだのに、今はどうてせう、あなたはこゝに私の腕に縋つてゐる――

――エレナさん、エレナさん』

女は情が迫つて來て、たゞもう身を震はせるばかり、微かに息の中から、

『妾の身體は貴郎に任せるわ』

二十八

ニコライ・アルテムキッチは眉根に皺をよせたまゝ、書齋の中を彼方此方とあるき廻つてゐた。シューピンは窓際に坐つて、靜かに煙草をふかしてゐる。

『まあ後生ですからそんなに室の中を目まぐるしく歩き廻はるのはよして下さい』と葉卷の灰を落し乍らシューピンは聲をかけて、『貴方に物を言はうと思つて頭を伸ばしてまつて居たもんだから頭が痛くなつちやつた、それに何だか知らないけれど妙に氣取つてギクリバッタリ見つともないぢやありませんか』

『何とてもいふがいゝやな、ちつたああれの身にもなつて考へて見なさい、おれはあの女にどれ程打ち込て片時も忘れずにゐるかお前にはわかるまい、

あれに久しく逢はないとおれは氣がくりてならんのだ……もう十月だ、そろ〳〵冬にかゝらうといふに彼奴一體レヴェルへ行つて何をしとるんだ』

『大方自分の靴下でも編むでゐるんでせうよ――自分の靴下をさ、さう〳〵たのでもあるまいからつてんで』

『貴樣勝手に笑つてまぜつ返すがいゝさ、ほんとの話だ、あんな珍らしい女はない、あんな正直な無欲な』

『だか例の手形のは引出したでせう』

『いやあの女の無欲と云つたら』と聲を大きくして『不思議といつてもいゝ位だ、それをよく人はやれあんな女は世間には箕ではかるほどあるとか何とかぬかしやがる、ヘン箕で計るほどあるなら一つ計つて出してからひたいもんだ。そのセファンム、クオンムレモントル！ おれを熱い〳〵とのぼせさせるほどの女は彼だよ、だがそれほどに思ふおれに手紙一本よこさんといふのはあいつも非道い』

『大分闇にのつてまくしかけますな、所で私に一つ妙藥があるんだがきいてくれますか』

『何だ』

『よござんすか、アウグスチナさんの歸つて來たときにですよ……』

『ふん〳〵それから』

『あの女に逢つたらばですぜ……私の考へ通りにやりますか』

『やるとも、やるとも、だからどうした』

『一つくらはすんです、そしてどんな顏をするか見る……』

するとニコライアルテムキッチは腹を立つて外方を向きながら『こいつまじめに何か實になる事を背へ出して呉れたのかと思や、フンこんな彫刻師なんぞの無主義な人間のいふことをまともにうけるのがわるいんだ』

『へ、無主義な人間ですつてさう〳〵近頃お馴染のクルナトフスキー君の御

得意の文句だつけ、さう〳〵あの主義の先生つい昨日も百留あなたの所から引出して行きましたつてね』

『ウンそれがどうしたつてんだ、一掴千金といふ大相場をやつてるんだ、勿論失敗したからつて愚圖々々いふべき條理はないのよ、だが貴樣のやうな連中にはあの人の眞價はわかるまいて』

『勿論あの人の考へは――まあよしませう、あの人が私の舅であらうとあるまいとやはりわからないんだ、だが百留の金は決して賄賂をとらぬと云ふ人には惡くない商法だて』

『何だ舅だ、馬鹿な、ヴヴ レエェ、モン シエール くだらんことをさうだこれがよその娘なら屹度あゝいふ人を二つ返事で夫にする、考へても見るがいゝ、愛想はよし悧怜ではあり、上流の人と交際はあるし、州廳には二つまで勤めてゐるし……』

『なに知事殿はお目出度くつて鼻緒とつて引まはされてゐるだけの事でさ』

『そりやさうかも知れん、外に始末のしやうがないんだ、それ丈あの人が實用の人で――世事に明るい證據だらうぢやないか』

『そして骨牌が御上手て』

『さうよ骨牌も御上手だ、だがあのエレナニコラエウナ――あいつばかりは得體のしれん奴だ、一體あいつ何が望なのかわかる人があつたら教てもらいたい位のもんだ。けふは滅法界はしやぎ切つてゐるかと思へば其あくる日は死んだものゝやうになつてゐる、ともうすぐ病人だ、見てゐられなくなるほど痩せつこけて、かと思ふとまたすぐけろりとしてゐる、そしてそんなにぐるり〳〵ひつくりかへるが、からきし理窟はないんだからな……』

といふ時可厭な顔付をした下男が盆に珈琲の茶碗とクリームの壺に砂糖の皿を添へてもつて來た。

『夫婿なんてものは親父が氣に入りさへすれば』とニコライは糖砂箸を振り廻し乍ら尚言をつづける。『娘が何と思はうがそんな事には頓着せん、それて昔日は結構すんでいつたものだ、それが今はまるて世の中が變つて來た。ヌウザヴォンシャンジエッウサ 何事もかは りゆく世だ 今ぢや若い女は勝手に自分の好な男と話もすりや、好な本もよむ、供もつれず勝手にどこへても出て行く、それが巴里風てそれてなければ上流社會の人とはいはれないんだそうだ、ついこの二三日前だつてさうだ、エレナはどこへ行つたときいたら外へ御出になりましたといふのだ、そこて何處へ行つた？　誰も知らん、何事だ、そんな事があるべき事だらうか』

『まあ珈琲を飲んてがへしてやつたらいゝてしやう、召使の前て物をいふなつて御自分てお仰る癖に』とシユービンは呟いた。下男はさつとシユービンの顔をにらめる。ニコライは茶碗をとりあげてクリームをついて砂糖の塊

を入れて珈琲を甘くした。

で下男が行つてしまうとすぐあとをつゞける。

『おれのさつきはうと思つた事は、おれの家でゐながらおれがあつてもないものゝやうだつて、それだけの事よ、この頃ぢや人は表面の風采で善惡をきめる、だからその男は其實莫迦なぬけた野郎でも豪さうな風をしてゐると人が尊敬してくれるが、天晴有爲の才を抱いて國家に功を樹てるほどの人であつても平凡らん風采をして――』

『で、あなたなんかは天成の政治家といふもんぢやありませんか』と冷然たる調子でシユービンは言葉をはさむ。

『あまりくだらん事は云ひなさんな』とニコライは腹を立てたらしく『貴樣自分の身分を忘れてゐるな、これもおれをないがしろにされてゐる證據だわ』

『伯母さんが貴方をないがしろにするでせうか……可哀想に』とシユー

ビンはぼやけた聲で、『いや伯父さん、あなたは罪な人ですぜ、それよか伯母さんにやる進物の事でも考へた方がましてすよ、もう五六日中に伯母さんの誕生日が來るつて云ふに、全くでさ、貴方にしてもらへばどんなつまらない事も伯母さんはほく〳〵してゐまさあね』

『さう〳〵』と口早に『いやよく云つてくれた、眞個にさうだつたよ、おれの所につまらぬものだがいつかローゼンストラウフの店で買つた筐がある、あれをやらう、だがあれて氣に入るかどうかしらんが』

『そりや例のレエルの新造にやるお積りて買つたんてせうが』

『ウン、さうよ、さうかもしれない』

『いやそれぢや御氣に召しませうよ』

と、かう云つてシユービンは椅子を離れた。

『お前今夜出かけるのか』とひどくうちとけた調子になる。

『え、まあ、貴方は倶樂部へ行くんでせう』

『だが倶樂部へ行つたあとで――そのあとでさ』

『いやいけませんや、明日仕事しなくちゃならないんです、また今度にしませうよ』といつて室を出て行つた。

ニコライアルテムキッチは眉をひそめたが、二三度室をあちこちと歩き廻り、抽出から天鵞絨をはつた筐をとり出して絹手巾で拭いて、散々表を返したり中容をしらべて見たりした揚句、蓋についた鏡でその濃い髪の毛を丁寧になで付けて、鹿爪らしく首を右へふつたり左へふつたりして、しきりに分目を氣にしてゐる。

と、誰か椅子の背後で輕く咳嗽をしたものがあるので、振向いて見ると、今しがた珈琲を持つて出た下男が居る。

『何か用か』

『旦那樣』と下男は改まつた調子で『あなたは私の御主人です』

『そりやきまつてるわ、それがどうしたと云ふんだ』

『旦那樣お腹をお立ちなすつちやいけませんが、私は子供の時分から御奉公申上げた甲斐には、せめての御恩返しと思つて是非申上たい事がムいますんで――』

『ウン何だ』

下男は立ち乍ち貧乏搖をして。

『あなたは先程』と口籠りがちに『エレナさんが何處へゐらしつたかわからなかつたと仰有いましたが、私にはよく存じて』

『馬鹿奴、何を喋々出任なことを』

『何と仰有つてもよろしうムいますが、四日前私はたしか御嬢さんがさる家へ御はいりになつたのを見かけましたんで』

『どこで、誰れの家だ』

『ボワルスキー街の、直き近所でムいます、私その家の門番に中にゐる人が

身の上まできゝました』

と、ニコライは足で床をどん〳〵蹴りながら

『默れ、この馬鹿野郎、よくも貴樣はのめ〳〵とそんな事を、エレナさんは慈悲深い方だから貧乏人の家を見舞にゐらしつたのだ、それを貴樣は――行け〳〵馬鹿ッ』

下男度膽を拔かれて戸口へ出やうとしたが、

『まて、貴樣、その門番は貴樣に何ていつた』

『何、何とも申しません、ただあの學、學生の方だとか――』

『默れこの馬鹿野郎！　いゝか、そんなくだらぬ事を一言でも外の者にしやべつて見ろ野郎どうするか……』

『ど、どういたしまして……』

『默れ！いゝか貴樣、一言でも口へ出した事がおれの耳にはいつて見ろ……貴樣の身體はどうしやうとおれの勝手だ、外に身の置處もないやうにするからさう思へ、やい、わかつたか、それてもういゝから行け』

下男はこそ〳〵と出て行く。

『あゝ、全體どうしたのかしらん』ニコライは獨になつて考へた。『彼の馬鹿がしやべつた事は何だらう、おれは、その家の中に住んでる奴を見つけ出さなくちやならん、おれは自分で行つて來やう、これてもう無茶苦茶になつちまつた……（下男なんぞに恥さらしな）』

で聲高に「下男なんぞに」とくりかへしてニコライは抽出に箱をしまつてアンナをさがしに行つた。アンナは顏にきれを卷いて寐臺の上に横になつてゐたが、その病氣の狀態を見ると、ます〳〵癇癪がおこつて來てどなりつける

と妻は喫驚してもう涙を眼中に浮べてゐるのだ。

二十九

久しく東方の空を蔽うた風雲は遂に破裂した。土耳古はすでに露西亞に向

つて宣戰を布告した。候國の撤兵期限は既に過ぎた。愈々シノープを破毀すべき其日は近づいた。インサロフが最近に受取つた數通の書簡は、時をうつさずブルガリアに向つて發足すべき事を迫つて居る。しかも彼の健康はなか〳〵回復しさうにもなく、例の嫌な咳はいまに治らず、身體はひどく衰弱して多少肺病の兆候が見えてゐる。そんなでゐながら尙家にじつとしてゐることは夢にも出來ない。本國からの報知は烈しく精神を興奮させて病氣のことなどを思ふ暇なからしめた。で始終馬で莫斯科の諸所方々を歩いて、ひそかに同國人の誰彼を訪ねまはつてゐる。家にゐれば終夜手紙を書いてゐる。晝は終日何處に居るか皆目行衛がしれぬ。もう近々に立つといふ事を宿の亭主にも云ひきかして、足手まとひになる樣な道具は殘らず呉れてやつた。エレナの方もこれには劣らず、何やかや出發の準備に忙しい。と、ある雨の降る夕方、エレナは室の中に惘帨の縁縫をし乍ら、何とはなしにう

ら悲しい思で外面に吹き荒ぶ風の音に耳をすまして、夢心地でゐる最中、小間使がはいつて來て、父親が話しがあるから母の室へ來てくれとの命令だと傳へて、室を出ぎはに、『母さまは泣いてゐらつしやる、父さまは何かひどく御立腹の樣子ですよ』といつた。

エレナは肩を聳して、母の室へいそいで行つた。母は懶げに摺椅子にぐたりとなつてコローン水を強く香はせた帨帨を鼻にあてゝゐる。父はと見れば爐の前に立つてその軍服の釦をしつかりと留めて、高い頸巾にコチ〳〵に糊張つた襟をして、かの議院の辯士といはるゝ得意の態度を作つてゐるらしい。で、辯士風の手の振り方をして、娘を椅子にかけさせたが、娘にはその意が通じないで訝かしげに顏を眺めるので、改めて嚴然たる容儀を作つて『あなたどうかおかけ下さい』といつた。

ニコライはいつも妻君に向つては『あなた』といふが娘にもかういふのは何

か異變のあるときに限るので。

エレナは座についた。アンナは鼻を啜る。ニコライは右の手を服の釦の間に差し入れて徐ろに口を開いた。

『エレナさん私は一つお前さんの辯解をきかう、いや辯解させなけりやならん事があるので呼んだのだ、私はお前の所行にはあきたらぬ――とばかりでは言ひ足らん、お前の所行を深く悲しい情ない事と思ふ、私――私も母さんも、それそこに厶る母さんまでどれほど心をいためたかと思ふ』

この文句を述立てる間、ニコライはただ沈むだ低音の調子を以てした。エレナはまづ父の樣を見やり、次に母の方を見てコッコリとなる。ニコライは尙言をつづけて

『昔日は娘が兩親の前へ出て震へた時代もあつた、兩親の威權を畏れ敬つた時代もあつたが、さういふ時代はもう過ぎた、情ない事だ（とまあ大概の人

はさう思つてゐるやうだが私はまだ道を忘れん、決してゆるさん――さうだ決してゆるせん――まだ道は存じて居るのだ』

『ですが父さま』とエレナは口を切ると、

『まあ口を出しなさんな、まづ昔の事を考へさしてくれ、私も母さんも義務は果した、私も母さんもお前に充分敎育をするには費用も勞苦もいとはなかつた。尤もその敎育からしてお前がどれほどの利益をえたかといふことは別問題だ、しかし、わしとしては考へる權利がある――わしとしても母さんとしてもさう信ずる權利がある。お前もその道德といふものを謹んで守る位の事はするだらうと――さうだ、これ位の事はお前にわしの娘として一言にしていへばクヌウ ヴゥ サヴオン アンクルケエ（最も心にか、る忘れぬ人）としてかね〳〵敎ておいたはづです、であるからしていかな新しい「思想」といへど、これ丈はいはば神聖な殿堂だ、よもや覆すことはあるまいと信じてゐたのぢや、し

かるに實際起つた事はどうだ。勿論今私は年頃の女には有勝な無考なまねをしたからつて責るのではないが、しかしこれほどまでにお前が我を忘れようとはゆめにも思ひがけなかつたのだ』

『父さま！』とエレナは遮つた『私もう貴父の仰有る事分つてをりますよ』

『否知るもんか』とニコライは一聲尖り聲で叫んで、いつしかこの雄辯家の態度も圓滿な演説の調も低音の調子もどこかへとんでしまつた。

『何を知るもんか、この淫奔女め』

『まああなた後生だから靜にいつて下さいよ』

とアンナは呟いた。

『ヴウム　フェート　ムークール　私困つちまふ』

『何が困る、これから何を私はいふか、まあそのつもりでゐなさい、わしはどこまでもやつつけるんだから』

アンナは諦めてぐつたりとなる。

ニコライはまたエレナの方を向いて『何を手前が知るもんか』

『妾悪うございました』とエレナは低い調子でいひかけるを

『やあ到頭いひ出した』

エレナは言をつづける『妾それはとくに申上げる筈て云はなかつたのは悪うございましたけれど——』

『これ』とニコライは遮つて『おれはたつた一言て手前を身の置處もないやうにして見せるぞ』

エレナは頭を上げていぶかしさうに父の顔を見る。

『さうだただ一言だ、そんなにおれの顔を見たつてしかたがない』と手を胸の上に組むて

『所で先づ聞く事がある、お前はボワルスキイ街のさる家を知つてゐるはず

だが、どうだ』と句毎に足で床をどん〳〵やつて『さ答へて見ろ馬鹿め、かくし立てするといかんぞ、ただの平民の下男づれ、い〳〵かこれ、卑しい下司のやうな奴に、手前はそこへ入る所を見られたんぢや、その手前の……』

エレナの眼は憤怒の色にかがやいた。顔は眞紅になる。『妾何も隠し立する要なんかございません、さうです妾はその家にまゐりました』

『よし〳〵、おいどうだアンナ、ぢや多分手前はその家に住むでゐる者を知つてゐるのだらうな』

『え〳〵知つてゐますとも、妾の夫です』

ニコライは眼の玉が飛び出るほど驚いた。『何ぢや手前の何だ』

『妾の夫です』とエレナは繰り返して『妾はヂミトリ ニカノロヰッチ インサロフさんと結婚しました』

『あのお前が――結婚を』とアンナは傍から訊る。

『え〳〵さうです、母さん、堪忍して下さい、二人はもう二週間も前に内密で結婚をすましたんです』

アンナは椅子にぺたりとなつた。ニコライは二足後にたじろいた、

『なに結婚した！　あの無宿者のモンテネグロの乞食野郎と！　ロシヤの古い貴族たるニコライスタホフの娘ともあらうものが一所不住の平民と結婚した！しかも兩親のゆるしもうけず、それで貴様はその様な結婚をして好い事と思つてるか、おれが訴へないものと、おれがゆるしてをくものと、貴、貴様が、いやおれがその……うんよし貴様は尼寺へおしこめてしまう、それから野郎は牢へ打込んで苦役させてやる、おいアンナこいつは今日限り勘當した、もうお前（妻の方を向いて）の娘ぢやないからさう思ひなさい』

『まああなた、後生だから少しまつて』とアンナはおど〳〵して云ふ。

『そして何時の何日どう云ふ工合にしてそんな事をやつた、誰が結婚さして

何處でどういふ風に、あ〳〵人が聞いたらみんな何と云ふだらう、何て大それた、それて貴樣はよくのめ〳〵と耻知らずなこんな大罪を犯して置き乍ら平氣で兩親の家に居る、貴樣神の罪を思はんか』

『お父さま』とエレナは云つて、(全身ブル〳〵と震へてゐたが聲は確乎してゐる)『あなたは妾をどうなさらうと御勝手ですけれど、妾を恥知らずの虚吐のと仰有る必要はございません、妾早くからあなたにいやな思をおさせ申したくないと思つてゐたんですが、どうせ二三日中にはみんな打明けて申さねばならぬ所でした、もう來週は夫と一緒にこの國を出發つ心意なんでございます』

『出發つとはどこへ行くんだ』

『夫の故郷へブルガリヤへです』

『ゑ、あの土耳古の國へ!』とアンナは叫んだが、氣が遠くなつて倒れてし

まつた。

エレナはあわてゝ母の方へ寄らうとしたが、

『出て行け』とニコライは娘の手を引つかんで叫ぶ。

『出て行けこの碌でなし奴』

がその途端、戸が開いて、血走つた眼をした蒼い顔が覗き込むだ。それはシユービンの顔であつた。

『伯父さん』と彼はありつ丈の聲を絞つて呼んで、『アウグスチナさんが歸つて來て貴方に御話があるつていひますよ』

ニコライは憤然と振り返つて、まづシユービンを室の外へ突き出してをいて、暫時躊躇したが、やがてその後から驅けて行く。

エレナは母親の足下に突伏してその膝に縋つた。

* * * * * *

ウワルイワノヴイツチは寢臺の上に横になつてゐた。ぼた〳〵した飾釦のついた領のない襯衣を太い頸にまいて、だぶ〳〵に女のやうな白い胸に垂らした大きな木の十字架と護符とを露はてしゐる。むく〳〵した足を海敷布でくるむてゐる。卓の上には蠟燭が一本ぼんやり點つてゐて、その側には麥酒の壺が置いてある。ウワルの足の方に寢臺に腰をかけて喋つてゐるのはシユービンてある。

『さうさ』とシユービンは思案するらしい調子で云つて『エレナさんは結婚して近々立つ心意ださうだ、それであなたの甥御は狂氣のやうになつて家中響く樣な聲て怒鳴り散らしてゐるんてす、妻君の寢室の戸をたてきつて誰にも知らせまいとしてござるが、あの怒鳴りかたては臺所に居る下男下女から、廐の馬丁まて一語殘らず手にとる樣に聞える奴さ、まだ湯氣をたてゝがなり廻つてゐる、僕なんぞは危うくぶんなぐられる所てした。それて父親の

權威をかさに着て、何の事はない頭痛がする熊角力の太鼓つてもんて騒いて皆んなを脅かさうといふんだが、御當人樣腹の中は案外空つぽだから可笑いぢやありませんか、アンナさんは半死半生の體てゐるが、娘が結婚した事よりか娘が遠い國へ行つてしまふつてのが餘計さわつてゐるんてす』

ウワルは始終神經的に指を弄つてゐた。

『母親かね』と彼は註を入れて『全くよ』

『所て親御どのは』とシユービンは言をつゞけて『大僧正にも訴へる、知事にもいや總理大臣にまても訴へるなんかと力むてござるが、結局エレナさんは行く事になるのさ、娘の一生を苦茶々々にする！　そんな事が何して出來る？　まあ外に仕方もないから根かぎり怒鳴り散らしてあとて尻尾を卷く分の事さ』

『さうもなるまいよ』とウワルはかう云つてまた壺の口から飲む。

『全くさ！　けれどあとぢやべチャクチャ隨分世間の評判はうるさい事だらうさ、けれどあの女はそんな事を怖がる人ぢやありません……てんで相手にしやうがないんだ、それてあの女はいよ〳〵行つてしまふのだ……がその行く先を考へるとゾッとする――あんなまるて人外境の砂漠のやうな所へ行く、もう僕はあの女が氷點下三十度といふ寒さに吹雪の中を眞夜中過ぎ、悄然宿場を出てゆく姿がまざ〳〵と目に見る樣だ、永久に國を捨て、家を捨て一切を捨て、ゆく――　けれど僕はあの女がこれまての決心をした理由は充分わかつてゐる、あの女をこの國に引とめる力のあるものは何がある、どんな人がある、クルナトウスキーにベルセネフそれに僕等、それ位のものぢやないか、それて何の心殘があらう、たゞ一つ氣がゝりな事は、あの女の夫――畜生癪に觸らあ――インサロフは血を啓いてゐるさうだ、よくない兆だ、僕も二日前あの男に逢つたがその顔は――ブルタスのモデルにはもつて

來いといふ顔だつた、ときにウワールさんブルタスを御存じか』

『何で知るもんかな、多分人だらうね』

『正に然り、人だつたんだ、そりや珍らしい顔だつたが不健康な恐ろしく不健康な……』

『戰にやりや同じさ　……』と一語簡勁。

『戰爭にやりや同じだ。確かにさうだ今日は先生仲々うまいこと云ひますね、だが生きてるにや少し都合がわるいからな、あの女だつて少しは生きてゐて一所に暮したからうさ』

『生きたい、若い人の事だ』とウワルは答へた『さうてす若い輝かしい勇ましい事てす、死、生、爭鬪、敗北、勝利、戀愛、自由、國家、さう、さういふものは等しく凡ての人に與へられてゐる』

シューピンは頭を胸にうづめた。

『さう』と彼は暫時默した後でまた言を續けた『インサロフはあの女に相應だけれど、馬鹿な、誰もあの女に相應するものはありはせん……インサロフが、インサロフが、つまらん御世辭を云つてゐたつてしかたがない全くの話があの男は立派な男だ。足がしかと地にすはつてゐる、尤も今日までの所では彼男も吾々罪人と別に變りはなかつたけれど――しかし吾々といへどそんなにつまらん蟲けらみたいなものかしらん、何と思ひますウワルさん僕は實際蟲けらのやうな人間だらうか、神はそれほど僕につらいだらうか、何の才智も能力も與へなかつたらうか、他日このバウルシユービンの名が一世に響く事がないとは何うして知れる、そらあすこの卓の上に銅貨が一つのつかつてゐるが、あの銅貨が百年も經てば後世の子孫が德を慕つてこのバウルシユービンの紀念の銅像の中に鑄込れる事がないとはどうして云へる』

ウワルは肱枕をして目を据ゑて、仕方なくて辯ずる美術家の顏をながめた

『それは遠い先のことさ』と例の身振をして

『今は外の人の話をしてゐるんだ、自分を持つて來ることはない』

『あゝ魯西亞人の大哲學者！』とシユービンは叫んで『あなたの云はれる一語々々純金だ、銅像は僕のだ、その時は僕は設計をする、それ貴方が今臥てゐるその姿勢がその中にあるのは懶惰か努力か、誰も知らん、私はそこを銅像にしたいと思ふんです、あなたは今日も僕の唯我心、虛榮心を責めたが御道理です自分の事ばかり云つたとて何になる、自分一人振り廻したとて何になる、畢竟無用の放言です、吾々は右を見ても左を見ても、今に一人の人物を得ないでゐる、到る處たゞ紛々たる虻や蚊だどれもこれもくづら〳〵と這ひまはつてくど〳〵云つてゐるハムレットの出來損ばかり、さもなくば腐れ切つた棒切のやうな奴、空太鼓を叩く薄つぺらな嘵舌家ばかりです、それでゐて奴等は碌でもない自らの馬鹿らしく細かな研究ばかりしてゐる、一臧一

情の微まで事々しく調べてこれは私の感じてゐる事だ、私の考へてゐる事だ、と、要するにそれだけの事だ、あゝ有用な實理に協つた事とするものは！否ただ一人でもいゝ、物のわかる人間がありさへすればあの女もあのか弱い女の身で吾々を捨てゝ行きはしませんぞ、網の目を逃れた魚の樣に大海へとび出してはしまひますまい、どうです、ウワルさん、いつその時は來るてせうか、いつその人は生れて來るてせうか』

『まあまちなさい』とウワルは答へて『そのうち來ます』

『いつか來る！　吾がこの國土、深き主の力！　いつか來ると貴方は云つた、よどざんすか、その語を銘にほつて傳へます、だが何と思つてあかりを消しちやつたんだらう』

『私は眠くなつた、おやすみ』

三十

シュービンの言は過まらなかつた。思ひもかけぬエレナが結婚の報はいたくもアンナの心を痛めて、それよりどつと床に就いてしまつた。ニコライは妻の娘に逢ふ事を禁じた。これをしほに主人公の威光を見せつけるには勿怪の幸ひと喜んでゐるらしく、家中の下女下男の誰彼の見界なく當り散らして『貴樣らおれを誰と思ふ、精々用心するがいゝ』といふ權幕。

が家に在る間はアンナは娘の顏を見る事も出來ず、僅にソオヤが傍に附添うてくれる位のものであつた。でソオヤも實際懇に看護につとめたが、折ふしは獨語に『ディーゼン　インサロフ　フオルチーヘン——ウント　ウエム（あんなインサロフなどを擇りによつて……そして誰に）』など呟くこともあつた。が、一度ニコライが外出でもする事があると——尤もニコライがて

の頃家にゐることと云つては稀なのだ、と云ふのは實はアウグスチナがレエルから歸つて來たので――エレナは早速母の室へ驅け込む。アンナは娘の顏を凝と見詰めたまゝ、何も云はず涙を眼にためてゐる。このまた口に出して小言を云はぬのがエレナには父のガミ〳〵怒鳴りつけるより遙かにきつく胸にこたへたので、さうは云ふものゝ、エレナは今迄自分の所行を悔いた事などは一度もないのだ。が、而も悔悟にも劣らぬ深い激しい悲哀の思ひは身にしみ〳〵と覺えて居たのだ

『母さん、ねえ母さんてば』といつもかう繰返しては甘へるやうに母の手を搖ぶる、そして、『妾どうにも爲やうがなかつたのよ、妾が惡いんぢやないわ妾あの人を愛しぬいて居るんだから、外に爲樣がないんだもの、あゝ云ふ人と緣がつながつて、それが父さんの嫌な人で、そして母さんとも別れて仕舞はなければならないと云ふのはさうした運命の罪なんだわねえ』

『後生だからお前』と、アンナは溜息を吐いて、『その事は云出しておくれてない、妾もうお前の行先の事を考へると胸がさけさうになるんだから』

『けど母さん、この位て濟むんだからまだしもと思つて頂戴よ、もし妾死んだとしたらどうして？』

『今もう現にそれぢやないか、二度と再びお前の顏を見る望みもなからうぢやないか、彼地へ行けばキツト陋い小舍の中で死ぬか――』

アンナが考へたブルガリヤと云ふ所は、何か亞比利亞の遠い沼地かさもなくばそれよりもゝつと甚い地方と思つて居たらしい。

『さもなくとも妾の命はお前と別れた先永くは保ちません』

『ねえ母さん、そんな心細い事仰有らないて下さいよ、またキツト逢ひませうよそれにブルガリヤにしたつて、ロシヤのやうな大きな町も澤山あるわ』

『そりや立派な町もあるてせうさ、けれど今は戰爭が始まつてゐる最中なん

だよ、鐵砲の彈が何時飛んで來るかしれやしません……それでお前直きお出かえ』

『えゝもう直ぐと――たゞ父さんさへ――だつてあんなに告訴するのなんのつて力むでゐらしやるんですもの、離緣させるの何のつて』

アンナは眼を昂げて天を仰いで、

『いゝえ、エレナ、父さんは決して告訴なんぞなさりやしません、妾だつて決して此婚禮が承知なんぢやない、その位なら一層死んぢまつた方が好いと思ふけれど、出來てしまつた事なら爲樣もなし、なるべくは娘の恥になる樣な事は爲たくないからねえ』

此樣にして三日四日過ぎた。やう〳〵てアンナは少し氣力を回復して、ある晩夫と共に寢室に籠るやうになつた。家内は一時火の消えた樣にひつそりして、初は何の物音もきこえなかつたが、程無くニコライ、アルテムキッチ

の鋭い聲がして、軈て聲高な怒氣を帶びた聲になつて、合間にも女の啜泣く音、抑へきれぬ泣聲さへも交るやうな騷になつた。シューピンとゾオヤとは暫少て聞き兼ねて室へ飛び込まうとするうちに、喧嘩は漸次靜まつたらしくほどなく靜かな通常の談話になつて軈て是も休むで、後はまたもとの通り森としてしまつた。たゞ折々微かな啜泣の音がしたが、ほどなくそれも休んで終つた。軈て錠をこじる音、抽斗の環の落ちた音がした。と、二三分經つて戸が開いて、ニコライ、アルテムキッチは現れた。て、シューピンとゾオヤとを尻目にかけたまゝ、廊下を突つ切ると、馬車に乘つて倶樂部に走らせた。やがてアンナはエレナを呼寄せ、姿を見るなり、ひしと抱きしめて止め度なく涙をはふり落した。

『もうすつかりきまつたよ、告訴もしやしないから、抑留めるものはありませんから、お前の勝手な時に私達を捨てゝ立つてしまふなり何なりお爲なさ

い』

『あのヂミトリにも一寸會つて挨拶だけでもして下さるでせうねえ』

とエレナは母のやゝ沈着いたのを待つて訊いた。

『まあ少しおまちなさい、とても今が今、妾とお前との仲を裂いた其の人に逢ふ程の氣力はありません、けれどまあお前が立つまでには何にかするよ』

『立つまでに』と悲しさうにエレナは同じ言葉をくりかへす。

アンナが云つた通り、此の許可を得むためにアンナはどれ程の骨を折つたが。娘に云ひはしなかつたけれど、實の所これだけにするまでには夫の借財を殘らず返濟してやる約束もしたし、それどころか、その時その場で、千留と云ふものを召上げられたのだ。その上彼はアンナにどんな事情があつても決してインサロフには逢はぬやうにと宣言して、終局までその人の事をモンテネグロの乞食野郎と罵つてゐたのだ。が、倶樂部へ行くともう相變

らず其の仲間の退職の陸軍大將と云ふ人に對つて、エレナの結婚話をして骨牌をとり乍ら、平氣な調子で、『時にお聞き及びでせうが、家の娘の奴がな、ちつとばかり本を讀ませ過ぎましたら、到頭大學生と云ふ男と結婚しましてな、』とこんな事まで云つて居る。大將は眼鏡越にその顏を見て、『成程』と呟いたが、『賭は何だ』と、まアこんな風だ。

三十一

エレナが出立の時日は刻々に迫つて來る。十一月もはや末になつた。どうしても二三日内には是非出立しなければならぬ。インサロフは既に一切の準備を調へて一刻も早く莫斯科を立たうと氣を焦てゝゐる。醫師も永く時を移す事の不利なることを說いて『早く氣候の溫かい地へ行く事ですこゝにゐてはいつまでも治る見込はありません』と云ふ。エレナだとて氣の焦だつ事は

同じだ。インサロフの顏色が惡く窶れた樣子が氣になつてならぬ。幾度か夫の變り果てた容貌を眺めて我知らずぞつとした。吾家にゐても居心地が惡くて尻のこそばゆい樣な心地がする。母親は全く死んでしまつた子と諦めてゐるらしく、父親は冷然といやな奴といつた樣子をばかりして居る。その實別離の期の近々のを悲しむ情は彼といへども決して人に劣るのではない、が父たる者を蔑にし傷けられた以上、義理にでも女々しい心を見せてはならぬ所と覺悟してゐるのだ。が、アンナはやう〳〵インサロフに逢ふ事を承諾した。インサロフは密り裏口から通される。て彼がアンナの室に這入つて來たは來たが、いつまでもアンナは一言も發しえない、それのみか當座は自分の顏をすら仰ぎ見るにえ堪へない有樣なのだ。インサロフはアンナの傍の長椅子に坐つて頭を垂れたまゝ對手に口を開くをまつてゐた。エレナはその向ふ側に坐つて母の手を自分の手にのせてゐる。と、やうやくにしてアンナは眼

を昂げて低い語調で『ヂミトリさん神樣はみんな御審判なさるてせう』と云ひかけて急に口をつぐみ、怨みの詞はそのまゝ唇に消えたが一段聲を高くして『ですがあなた御氣分が惡いんてせう、エレナ氣分がお惡いんだらう』

インサロフも默つて居れず『えゝ病氣にかゝつたもんですから今ても實はさつぱりしません、しかし本國の土を踏みましたら直ぐ又元の通にならうかと思ひます』

『あゝブルガリヤだものね』とアンナは呟いて腹の中でやれ〳〵この男は死にかゝつてゐる。聲が嗄れて眼は凹んでまるで骸骨だ。あれあの通り上衣が背中て袋のやうになつてゐる。銅貨のやうな黃い顏をして體中骨ばかりだ。それて、あれがこの男の女房、而もこの男を愛して——どうしても夢としか思へない。こんな事があるもんぢやない』と思ひつゞけたうち、ふと吾に返つて『ヂミトリさんあなたはどうしてもあのどうしてもブルガリヤへ御歸國な

さるの』

『どうも外に爲樣はありません、是非行かねばならんのです』

アンナの眼はいつかまた涙がさしぐまるゝので、『ねえヂミトリさん貴郎は決して妾丈の苦勞はなさりますまいよ、けれどまア末長くあれを愛して精々面倒を見てやつて下さい、きつと御賴申しますよ、妾の生きてゐます間はあなたが御困りになる樣な事はしませんから』アンナはこの上をいふ事が出來ないで默つてその手をひろげエレナとインサロフとを胸に抱き締めた。

ついに別れの日は來た。エレナは兩親に別を告げて自家を立出でインサロフの宿から出立する事にした。出立の時刻は十二時と定まつた。十二時の十五分前といふにベルセネフはやつて來た。彼はインサロフの宿には同國人の誰彼が見送りに來てゐることゝ豫期てゐたが、その人達はすでに立つてしまつて、例のお馴染の二人の不思議の人物すらもインサロフの結婚の席には立

ち合はずに立つてしまつた。仕立屋の主人はこの「善い旦那」を丁寧に叩頭して迎へたが、この男朝からへゝれけに醉つぱらつて居たのだ。蓋し別離の悲しさをまぎらす爲か、てなくば諸道具を貰つた嬉しまぎれの祝心てがなあらう。女房は正直な女だから夙にもう避けてそれを對手にせぬ。室は行李が一杯に散らかつてゐる。一個の革袋と二個の繩からげした箱とが床の上に置いてある。ベルセネフは窓際に立つてじつと感慨にふけつてゐる。胸の中に群がるその人の悼ましい追懷はまアどんなだつたらう。十二時はとうに過ぎて馭者は既に馬を車にかけたが、若夫婦の姿は未だ見えないのだ。が、やがて階子段を急ぎ足に上る音がしてエレナはイナサロフとシユービンとに伴はれてはいつて來た。見ればその眼は赤く腫れてゐる。無理もない、半死半生のありさまのまゝ母親を捨てゝ來たのである。まことに悲しい苦しい別れだ。エレナは久しぶりで今ベルセネフに遇つた。尤もベルセネフの方でも

スタホフ家へは近頃非常に足が遠くなつてゐたのでエレナもこの人に逢れやうとは豫期してゐなかつたものらしく『まあ貴方が來て下すつたの、よくねえ』と突然その頸に縋つた。インサロフもまた別るゝ友を抱いた。しばらくは一座はしんめりと靜まり返へる。三人相對して今更何の言葉もなく、何の思もない。てまづ輕く口を切つて一座の滅入つた氣を引立てやうとしたのはシユービンである。

『われ〳〵三人は再び最後に此處で落合つた。この上は運命のまゝに從つて過去は過去として笑つてしまはうではないか、神は吾々の新生涯に幸するよ、ゆく手はとぼし御神と共に』と歌ひかけてやめてしまつた。彼は死者の前で歌を唄ふは神を汚すものであると感じたので。と、この刹那シユービンの所謂過去――別離を惜む三人の過去は亡びた。實を云へば過去は亡びたのだが、それは更に新生涯に生れ出んが爲である。が、その共に亡びたはおなじである。こそで、インサロフは妻の方を向いて『てはエレナもう萬端の用意はとゝのつてゐると思ふたが拂ふものは拂つたし、始末をつけるものはついたし、たゞもうこの革袋を階下に運べばいゝのだ、御亭主！』と、亭主は妻と娘を引つれて室に入つて來た。足はよほどフラツイてゐるがインサロフの命令はよくきいて革袋を肩にのせるとどたり〳〵と階子を下りて行つた。

『これからロシヤの風儀に從つて坐らうぢやないか』とインサロフはいふ。人々はみな座に就いた。ベルセネフは古い長椅子に、エレナはその傍に、宿の女房と娘は頭を低く垂れて、闕際に立つてゐる。暫時みな默つてゐたがやがて人々互に顏見合せて莞爾した。が、何のわけで莞爾したのか、誰もしらないのだ。各自に何か別離の挨拶を述べたいと思つてはゐたが、誰しも――勿論目をまるくするばかりの宿の女房と娘をのけて――このやうな時に際しては何でも平凡なことをならべる外はない。考へて搾らへ上げた文句などは却つ

てわざとらしくこんな場合には適はぬものだ。で、インサロフはまづ立上つて十字を切つて、『さあこの室もこれでお別れだ …』と叫ぶ。さて後は接吻の音ばかり。その冷い接吻をとり交してすべて旅路の平安を祈る口の中でついでは手紙をきつとよこす約束を最後にあわたゞしい告別の挨拶。

エレナは涙にくれて馬車の中に坐る。インサロフは丁寧に妻の足を温かにつゝんでやる。シユービン、ベルセネフ、宿の亭主、女房、娘、(例の帽帽を不相變首に卷いて) 皆は上り口の段に立つてゐた。と、一輛の美くしく飾つた橇が疾驅して庭先へ驅込んで來た。その中から外套の頸につもる雪を拂つて飛び下りたのはニコライアルテムキチであつた。

『や、有難い間にあつた』と彼は叫びざま馬車に驅けよつて、『さあエレナ最後の別の祝福だ』といつてポケットから天鵞絨にぬいとつた小い十字架を出して襟のまはりにかけた。娘は啜泣きして父の手を接吻する。その間に馭者

は橇の中から三鞭酒の瓶と三つの杯をとり出した。

『ぢやそれ』といつてニコライは大粒の涙をハラ〳〵と落して『門出の無事を祝して……のむのだ』と、かう云つて三鞭酒を注がうとするが手が震へて酒はだら〳〵と雪の中にこぼれる。彼は一つの杯をとり餘の二つをエレナとインサロフに與つた。インサロフはその時すでに妻と並んで坐つてゐたのだ。

『神はめでたく』とニコライはまた云ひかけてあとがつゞかなくなる。彼は盃を干した。二人も飲むだ。『ぢや今度は君達に』といつてニコライはシユービンとベルシネフの方をむいた。が、その瞬間馭者は馬に鞭を當て出したのでニコライはあはてゝ、馬車の方へ馳せよる。

『これ手紙をよこすことを忘れるなよ』といつた聲はおろ〳〵ごえであつた。

エレナは首をさし出して聲高く『では父さまさよならアンドレイさん、バウルさん、みなさんさよなら、ロシヤの國にもさよなら』といつてぐつたりと

腰を下した。馭者は再び鞭をふるうて一聲口笛をならした。と馬は雪を蹴つて車は門を離れた。やがて、それも見えなくなる。

三十二

四月のある朗らかな日であつた。ヴェニスの本土とリドと名ける細帶のやうな洲とを界して居る幅のひろい鹹澤の上を舳先の突出たゴンドラは船頭の棹さす手につれて悠々と水を截つて漕ぎ下つて行く。其底に日除の下に柔かな革蒲團に凭つてゐるのはエレナとインサロフである。

エレナの面貌には莫斯科出發の頃とは目に立つ程變つた所はなけれど、その表情は怪しく變り果てゝゐる。見ちがへる程沈欝な嚴つい所が見えて居て眼は前にも增して晴々しい。姿はまたいよ〳〵しなやかに整つて來た。髮の毛は濃くふつさりと波を打つて、白い額にも生々した頬にもかゝつて居る。た

ど笑をふくまず、キと結んだときの唇に微かな一筋の皺の寄るのが、胸に絶えない人知れぬ物思を見せて居る。これとは反對に、インサロフの顏にはその表情に少しの變化も無いけれど、容貌は痛ましくも衰へ果てゝ居る。げつそり肉は落ち、目に立つ程年も老れば色も蒼し、脊も屈んだ。絶間なしに枯れた咳をして、凹んだ眼の底は異樣に烱々と輝いてゐる。魯西亞を出てから途中維也納で病が募つて、二箇月も逗留したので、夫婦がやつとヴェニスに着いたのは最う三月も末であつた。道と云ふ道は既に閉塞されて終つたので彼は是からザラをぬけてセルビヤへ出やうとするのである。

戰爭は正にダニューブ河畔に闌で、英佛は既に魯國に向つて宣戰を布告した。スラブ諸族の國に總て蹶起して反亂の用意を整へて居る。

二人が乘つたゴンドラは今やリドの入江の中にとまつた。エレンとインサロフは狹い砂路の毎年植ゑかへて、毎年枯れると云ふ枯れ掛つた並木の間を

リドの海に向つた岸の方へと歩むだ。

二人は濱づたひに歩いた。アドリアチックの暗綠の波は眼前に寄せつ返しつ、鞠躬として泡沫を浮かべて、岸近く迫るかとすれば早くもさつと引く波と共に、後には幾千と知れぬ幼けな貝殼や、さま〳〵の藻屑を濱邊に殘して行く。

『何て寂しい所なんてせう』と、エレナは口を開く、『こんな所へ來て貴郎また風にあたると不可ないわねぬてもわざつとこんな所へゐらつしやるのは譯があるんてせう、妾知つてゝよ』

『風にあたる』と、インサロフは口早に云つて苦笑をしながら、『風にあたるなんて云つて居て戰に出られませうか、私が此處へ來たのは……理由を話しませう、私は海の向を眺めて居ると、此處にゐても何だか本國に近くなつたやうな氣がするんです――それ彼の方角です』と云つて、東の方を指して

『風は彼處から吹いて來るんです』

『この風で吹き送る舟を貴郎は待つてゐるんてせう、あれ白い帆が見えますわあれぢやなくつて』

インサロフはエレナの指す儘に海の彼方をながめた。

『レンヂッチは一週間中に萬端の支度を整へて呉れる筈なんです、あの男なら確かです、聞きましたかエレナさん』と、急に力を入れてダルマチヤの漁師達は鉛の錘を――そら網につけて底へ沈める――この鉛を彈丸にしたと云ふ話です、彼等は何の貯蓄がありませう、たゞ魚を捕つて身命を繋ぐばかりです、それても彼等は國の爲には喜んて唯一の財產を擲げ出して、餓死するを厭はない偉いものです』

『アウフゲバスト。(氣をつけろ)』と突然後ろて鋭い聲て叫んだものがある。

と鈍い馬蹄の音が聞えて、短い鼠の外套を着て、綠色の帽を被つた墺太利

の士官が驅けて來て、ふと傍を過ぎた。――二人は殆ど道を除けるひまもなかつた。

インサロフは愁然として其の後影を見送つて居る。

『あの人が惡いんぢやなくつてよ』とエレナは低聲に呼いて、『此處には全て路がないんだもの』

『あいつが惡いんぢやない』とインサロフは繰返して、『けれど、あいつの叱咤した彼の聲、彼の髯、彼の帽子、彼の一體の容姿て、胸の血が煮えくり返へる樣てす、さあもう歸りませう』

『えゝ、もう行きませうよ、ほんとにてゝは寒いわ、貴方はまた莫斯科てあんなに患つて置き乍ら、ちつとも氣を附けなかつたもんだから、それが維也納へ來て募つて出たんてすわ、是れからはもつと用心しなけりやいけないわ』

インサロフは答へなかつた、が同じ苦笑がまた唇頭に上つた。

エレナは尙ほ言葉を續けて、『ね貴方、おいやてなけりや、大運河の方へ行つて見なくつて、今迄居る間、ついほんとにウニネを見物した事はないんですもの、それから晩になつたら劇場へ行きませう、妾もう二枚切符を買つといたの、何ても新しいオペラを演つてるんてすつて、ね、今日は是から思ふさま二人て遊ばうぢやありませんか、もう政治の事や戰爭の事や何もかもみんな忘れてしまつて、最うたゞ二人が生きて、呼吸して、考へて、二人が何時までも〳〵同一體だといふ事ばかり考へて――ね、可いてせう』

『貴女の云ふ事なら、私にも可い事なのは定つてるぢやありませんか』

『さうですとも』と嫣然して、

『さあ、行きませう』

二人はゴンドラの中へ歸つた。て船頭にゆつくり大運河を漕いて行けと命じた。

春四月、ヴエニスに遊んだ者でなければ、共に此仙郷の美を談ずる事は出來ない。ふつくりと物懷しい樣な春色が、ひつたりヴエニスの風光と調和して、彼の爛々たる夏の日雄麗なゼノワの風光に於ける如く金紫たわわに熟る秋の夕の羅馬の大都に於けるがごときものがある。ヴエニスの風色は春のやうに妙に人の胸懷を動かしてそゞろ憧れ心地にする。何か前途に神祕らしく何となく手にとられさうな悅樂にそゝられるやうに妙に人の氣をいらだゝせたり惱ませたりする。

物皆光彩を帶び、物みなどんよりした手ざわりのある、たとへば愛の息といつた樣な霞の中に包まれてゐる。物みな靜かに、物みな懷かしく、物みな其名からして女性的である。『美しい都』とはよくも名けえたものだ。宮殿寺院の建物は層々相重つて若き神の美しい夢のやうにうつすりとかすむでゐる。音もせず流れてゆく運河の銀鼠色に光つて、絹のやうな澤を帶びた水の色。音も

せず波を截つて行くゴンドラ。肩摩轂擊擾々たる人寰を遠く離れたこの境。すべて何となく仙郷らしい不思議に人を魅し去る力がある。

『ヴエニスは亡びた、ヴエニスは荒廢した』と其市人はいふ、けれどこの名殘の美――斷滅の美――ばかりは、この市全盛の世、萬象爛漫の春を誇つた其世にも絕えて見られぬものであつたらう。ヴエニスを見ざるものはヴエニスをいふ能はず。カナレットオといへどガルディといへど（近代の畫家は暫くいはず）此しつとりした銀色の大氣身に近くして、とらへ難き地平、さてはくつきりした線とに溶け入つた色彩の、神々しい調和を寫すとは出來なかつたのだ。敗殘の餘生を生き存へた人はヴエニスを訪ふべきでない。そのやうな人々にとつてヴエニスは情なくも昔日の見はてぬ夢の空しい追懷の種となるばかりだ。けれど若い力のみち〳〵た人生の歡樂を味ひうる人々にとつては如何にもヴエニスは美しい。この仙郷の天地の中にあつて、ほしいまゝに其歡

樂を盡さしめよ。ヴェニスはその褪めはてぬ光彩を以て更に〳〵それをうつくしくするであらう。インサロフとエレナの乘つたゴンドラはクヴディシアヂン、大統領の宮殿、ピアッエッタを過ぎて大運河にはいつた。兩側に大理石の樓閣の相連なつてゐるのがふわ〳〵と飛んで行くやうで、其美觀は少しも目にとまらぬ。エレナは無上に氣の浮き立つを感じた。一色の碧空にたゞ一點の陰雲を留るのみである——しかもそれさへ遙かの空である。インサロフも其日は氣分がことの外よかつた。二人はリアルトオの鋭角のつくるところまで行つて後退した。エレナは寺院へはいつたらインサロフが冷えて惡からうと思つたが、美術院ならと思ひついて船頭に命じてその方へ舟をやらした。二人は倉卒にしてこの小博物館の展覽室を殘らず通り拔けた。二人乍ら骨董癖も翫賞癖もないので繪毎に足を止めて見るといふ事はなかつた。つまりこれが爲に何の檢束されたともないのだ。二人はいつか陽氣な浮き

〳〵した氣分になつた。一切の物がいつの間にかひどくなつかしいものになる。(小見はひとり最よくこの感情を知つてゐる)エレナはチントムフトオシ作の呵責をうけてゐる奴隷を救はん爲、大空から蛙のやうに飛び下りかゝつてゐるセントマークの繪を見ると、堪えず聲を立てゝ笑ひ出し見物に來た三人の英人の眉を顰めさせた。と、今度はインサロフがチシアンの昇天の圖の前景に點出された、腕をひろげてマドンナの昇天を仰いで居る、どこかに氣高い所のある骨組の逞ましい農夫の姿に心自ら熱するのであつた。そしてこの天父の懷ろへ進み入らうとする端嚴たる風姿に對して二人はいたく感じ入つた樣子。

老キマダコネリアノの崇嚴な畫風を愛した二人は軈て美術院を去らうとして、また其の背後の英人——長い兎のやうな齒並、鰌のやうな髯の——を振返つて、思はず吹き出した。二人は船頭のつんつるてんの短衣、短い洋袴の

姿を見てまた笑つた。二人はまた古着を賣る婆さんの頭の突先に白髮の髢を載つけた格好を見つけて――いよ〳〵笑つた。二人は互に顏見合せては嘻々と云つて居る。それから直に二人は、ゴンドラの中へ歸つて、互に手を堅く〳〵握りしめた。宿屋に歸ると、室に驅入つて食事を吩咐ける。そして互に食物のすゝめつこをして、莫斯科に居る友人達の爲に祝盃をあげ、魚料理の風味が好いと云つて給仕を賞めそやした。給仕は肩を聳して足を摺つたが室を出ると首を搖つて吐息と共に「ポエレッテイ」(可哀さうに)と云つた。食事を濟まして二人はいよ〳〵劇場へ行く。

エレナの云つた新作の歌劇と云ふのは、エルヂイ作の實を云へば稍や野鄙の嫌はありながら、今日では歐洲各國の劇場に普く演ぜられて、魯西亞の人も能く知つてゐるラトラヰアタの曲であつた。ヴエニスの芝居季節はとうにもう過ぎた頃で、出て來る歌女の一人として名の知られたものでないのが、

各自に懸命の聲を張あげて歌ふ。中にキオレッタに扮した女優は餘り名も知れて居らず、見物の喝采も至つて少い所から見ると人氣も無いのらしいが、藝は滿更のものではない。年は未だ若いが、容貌は餘り好い方ではなく、黑眼勝の少女で、聲も整はぬばかりに最う潰れかけて居る。衣裳の好みも拙くたゞピカ〳〵と小惡らしいもので、髮は紅い網の中につゝまれ、色の褪めた空色の繻子の衣裳はきつ過ぎてしつとり身體に合はない。ぼて〳〵した瑞西風の手袋は骨ばつた臂の上へまで來てゐる。げにやペルガメス邊の牧羊者の娘の風情のキオレッタに巴里の遊女の好みなどの分りやう筈はないのだ。おまけに舞臺の上の動作に至つては不馴な所が見えてならぬ。が、その所作には多少眞實な所があつて、愁ひ技をせぬ所に天眞な趣がある。その歌ふ聲の表情の力に富んで、調子に情のこもるのは、伊太利人に限る妙技だ。エレナとインサロフはぽつゝり舞臺の傍の桝に入つて居た。美術院での浮かれ

心地はまだ去らない。妖姫の手に落ちた薄命な著者の父が黄色の衣衣、散髪の白髪と云ふ扮裝て場に上つて口を引曲げ、やらぬ前から度を失つて、たゞ微かな低音の顫へるのて歌ひ出すと見物はどつと笑つた。……が、キオレッタの所作は流石に人々を感動させたらしい。

『みんなあの女にはちつとも拍手しないけれど』と、エレナは口を開いて、『妾あのいやに氣取つた人氣役者の顏をしかめたり嬌態をしたり、始終場當りばかりやるものよりか、彼の方がどれほど可いか知れませんわ、あの女は全て眞身になつてやつてゐるやうですもの、御覽なさい、見物の事なんか氣にもとめてない風だから』

インサロフは桝の椽に身體を乘り出して、凝とキオレンタの方を見た、そして、

『さう、あの女は眞身になつてゐる。あの女は自身が眞に墓の緣へのぞむて

居るやうな氣込なんだ』と、インサロフは說明する。エレナは默つて居る。

第三齣は始つた。幕は上つた。エレナは寐臺や引あげた帷帳や藥壜や笠をかけたラムプやなどが眼に入ると、ブル〳〵と震へた。つい前頃の自分達の事を思出したのてある。「未來はどうてあらう、現在はどうてあらう」と、云ふ思がふと心の中に閃めく。と、その心中に思ふ事が早くも外に傳はつた樣に、舞臺の上の俳優のやる眞似事の咳に應じて、桝の中のインサロフが例のかすれた本物の咳をする。エレナは偷むやうに夫の顏を見たが、やがてまた自分の顏に平靜な沈着いた色を見せた。インサロフはその心を悟つて、自分もにつと笑つて見せて、靜かに歌の一節を口吟んだ。が、それも程なくして止める。キヲレッタの所作はます〳〵油が乘つて來て、自山自在の境に入つた。すべて横道の仕料、無駄の仕料を省いて、直下に自己を發露した。俳優に取つて最も大きな勝利は是てある。更に進んて、殆ど有り得べからざる境界を

も超えて、縦な技術を行つた、而も其の超ゆべからざる境界を超えてこそ美の幻境があるのだ。

見物はゾクリとして、驚き呆れた。震へ聲の顏のまづい女優は、今や觀客を檎捉にし得て、思ふが儘に悲喜哀歡せしめんとする。其の歌聲も最う震へ聲ではなくなつた。流麗にもなり力も加はつた。と、アルフレッドオは上場した。キオレッタが觀喜の叫びは、柱礎の如き見物の喝采を捲き起す。その勢は北歐の劇場にはたえて見られぬ有樣だ。暫時間を置いて、――觀客は再び恍として沒我の境に入る。この曲の山たる決闘は始まつた、作曲者はこの中に青春徒らに過ぎ行く悲哀、望の絶えた便ない戀の最後の爭ひを巧に表し得た、萬人の同感に醉はされ、藝術の歡樂と現實の苦惱とがごつちやになつた涙を眼中に溜めて、歌女は心中に湧きかへる情熱の千波萬波のまゝに身を漂はして居る。やがてそい顏の工合が變る。搗て刻々にさしせまる死の徵候に

對して、

『ラッシカ ミイ キエロオ――モリール シイ ギヲワナ』（死なば死れかし若くして死ぬるこの身か）

の詞は天上にひびく熱烈なる祈禱の聲となつて迸しり出た。狂してやうな喝采の聲、歡喜の叫びは劇場を震憾した。

エレナは全體中水を掛けられた樣に感じた。そつとインサロフの手を探つて、それをしつかり握りしめる。男も握り近す。が女は男の顏を見ず、男も女の顏を見なかつた。二三時間前ゴンドラの中に在つて握り返したその時の心持とは殆ど全く異つて居たのだ。

劇場を出て、二人は再び大運河を宿の方へ漕ぎ下つた。夜はかなり更けて居る。晴れた靜かな晩だ。先刻と同じ宮殿樓閣は又二人を迎へたが、而も前とは全く異つた者のやうに見える。月影に照らされた所は蒼味がゝつた金色に光つて、細々とした裝飾や窓や樓臺の線は蒼い光の中に沒して見える。影が

一杯にうつすり射してゐる所は外よりもくつきりと出て居る。小さい紅燈を掲げたゴンドラは、いよ〳〵音もせずいよ〳〵速かに走せて行く。網鐵の舳先は神秘の色をして光る。櫂から滴る雫が月の光をうけて銀色に光る。あちらこちらに船頭の短く低聲で呼びかはすのが聞える。彼等の周圍をつゝんだ寂寞を破るものは、ただこれだけである。インサロフとエレナの宿屋はリワディンアヂニイの澁にのぞんでゐる所だ。宿屋まで來ぬ前に二人はゴンドラを下つて、聖馬加の廣小路を幾度もめぐり歩いた。迫持の下には遊歩の客が三々伍々咖啡店の前に群がつてゐる。わが愛する情人とただ二人手を携えて、異郷の都に異郷の人の中をさまよひあるくのは、また格別の樂しみのあるものである。物として美しからぬはなく、意味深からぬはない。すべての行きちがふ見知らぬ人々にも自分等と用じい平和幸福を分けてやりたいやうな心さへ起こる。が、今、エレナの心には、そのやうな幸運のまゝに身を任す事の

出來ない微かな曇りがある。今の先、心にうけたかのキオレッタが悲哀の印象は、今もなほ胸を騷き亂して止まない。大統領の宮殿の前を通りながら、インサロフはまた無言のまゝ低い迫持の中から突出て居る墺太利の大砲の筒口を指して置いて慌てゝ帽子を目深にした。が、何と云つてもインサロフは、疲れが出て仕方がないので、聖馬加の寺院の圓屋根に月光に照らされて所々燐火のやうな色をして光つて居る亞鉛葺の所をチラと眺めたきり、二人はソロ〳〵家路についた。二人の居室はリワディシアヂンイからギウテッカへとひろがつたら鹹澤に眺むてゐる。殆んど眞向になつて聖ジョーシの細い塔が聳えてゐる。右手には天際高く稅關の黄金の球が光つてゐる。花嫁のやうに裝ひかざられて、寺院の中でも最も美しいパラディオのレデントールが屹立してゐる。左手には船の黑い帆柱や蒸汽船の煙筒などが見える。半ば捲き上げた帆は大きな鳥の翼のやうに懸つてゐるのがある。旗は殆んど動かずに

ゐるやうだ。インサロフは窓際に出だが、エレナはあまり永く風にさらされて居ない樣にと注意する。さう云ふ際から急に熱が出てがつかり虛脛に襲はれたやうだ。が、その靜かな物懷し夜、穩かなやさしい空氣、たとへどんな苦惱があらうともどんな悲哀があらうともこの明徹玉の如き空の下にこの純潔な聖い光の下にはいつしかやんはりと溶け去つてしまふらしい。『あゝ神よ』とエレナは心に念じた「何故死といふものがあるだらう別離といふ事は、あるだらう、病だの涙だのといふものがあるだらう、そんなものがあつてどうしてこの美、この樂しい希望の情、永久の住家とも思ふ慰めなどといふものがあるだらう。この笑みかけて居る樂しい空の意味は何であろう、この幸福な眠つてゐるやうな地は何であらう、一切は我が心中に思ふ假の象て、心外のものまことは冷い沈默なものであらうか、われはただひとり……ただひとり、……それで何處を振り向いてもすべてこの人力の及ばぬ深い〳〵底ま

て探つても……何物も自分達と親しい者はないのであらうか、何も何も妾達とは異つた遠ざかつたものばかりなのであらうか、もしさうとすれば何故あつて妾達は祈禱をしたくなつたりまた時には祈禱に歡喜を覺えたりするのであらう……（こう思ひながらもモリールシイギオワネ（こんなに若くて死ぬとは）と心中に繰り返して居る）……したらもう慰めとか救ひとかいふことはないものだらうか……あゝ神樣、奇蹟を信ずることは出來ないものでせうか」から考へてエレナは握り合した手の上に首を垂れた。「もう澤山だほんとにもう澤山なのだもう何時間どころか何どころかもう何週間といふ間二人は一緒に暮らした、それに此上幸福になんて何てのぞむ權利があらう」エレナはこのやうに自分の幸福に考へ及んで妙に怖くなつた。「それが出來ぬものなら、どうしてもゆるされぬものなら　あなたは天のすること……こちらは人間だ、罪の深い人間だ……モリール　シ　イギオワネあゝいやな辻占だもういや〳〵あの人の

生命の入用なのは妾ばかりぢやないのだ」

「けれどこれが天罰だとしたらと」彼女は再び考へ直す「われ〳〵は自分のした罪業の報を充分うけねばならぬのだとしたら妾の良心は黙つてゐたのだ、さうだ今も矢張黙つてゐるけれどそれが罪のない證據だらうか、あゝ神様われ〳〵はそんなに罪深いものでせうか、この夜、この天をお作んなすつたあなたが二人愛し合つたばかりでわれ〳〵をお罰しなさる思召、そんな事があるでせうか、もしさうならあの人か罪を犯したなら妾も罪を犯したなら」と思はず力をこめて「神様とうぞあの人の、否われ〳〵二人のせめては立派な名譽ある死に方をするやうに――せめてはあつちの本國の戰場で死なせて下さい、こんな薄暗い室の中などでなく」「けれど母さんにはまアどんなにも淋しい悲しい思をさせたらう、さう思ふと」とエレナは自ら問うて思ひ亂れて何の答も出ないのだ。エレナはすべての人の幸福は他人の不幸の上に築

かれるといふさと、一丁度彫像を安置するには臺石がなくてはならぬ、そしてその臺石はどうしても外のものの不利の上に築かれねばならぬと云ふ事は知らなかつたのだ。

『レンディッチ』とインサロフは思はず呼んだ。エレナは爪先立して夫の傍へ近より、のぞき込むやうにして顔の汗を拭いてやる。彼は枕の上で少し身動いたがまた沈着いた。

エレナは再び窓に歸つて再び物思に耽つた。そして心中自ら何の恐るべき理のなきことを論議し斷言しても見た。が、ついには自分の氣の弱いのを恥づるに至つた。『何の氣づかはしい事があらう、あの人は段々よくなつてゆくのぢやないか』と獨語を云つて『でも今日劇場へなんか行きさへしなけりやこんな考はちつとも起りやしなかつたのだもの』

と、其刹那ふと水上高く白い海鷗のとぶのを見た。多分漁師にても脅されたの

てあらう、音も立てずしどろもどろに何處か下り立つ所を探すものゝ樣にとんで行く。「さあ、あれが此方へとんで來れば吉事の兆にちがひない」とエレナは獨り考えた……鷗はくるり〳〵と舞つてゐたが羽を縮めると彈丸に當つたやうに悲しさうな音を立てゝ薄暗い遠くの小舟の後に落ちた。エレナはブルッと震へた。が、やがてその震へたのが自分ながらはづかしくなつて衣服も着かへずせはしく荒い息づかひをして、ねてゐるインサロフの傍に横になつた。

三十三

インサロフは其翌朝、いつものやうに眼を醒したが、頭は岑々と痛むて全身拔けるやうにひだるく感じた。それても起き上つて

『レンヂッチは來ませんか』と問うた。

『えゝまだ』と、エレナは答へて、戰爭の報道を載せた最近の「オッセゲト

ーレ トリエスチノ」を渡した。インサロフはこれを手にとつて讀むて居る傍で、エレナは頻に咖啡をこしらへてゐた。すると、誰か戸を叩くものがある。

『レンディッチが來た』と二人は同時にさう思つたが、『這入つてもよごずんすか』といつた聲は、たしかに魯西亞人て、エレナとインサロフが、顏見合せて怪しむ間もなく、つか〳〵這入つて來たのは、華美な姿をした、相場て一儲して來たとても云ひさうに、顏中テカ〳〵光らせた若い男だ。彼は自ら莫斯科の何某の家て面識になつた者と名のつて、それから二三時間口から出任せに齒の浮くやうな事を獨りで喋り散らして、またあがりますといつて出て行つた。この不意の襲擊を喰つて、インサロフはぐた〳〵に疲れて長椅子の上に倒れた。て愁然とエレナをかへりみて、『あゝいふのが魯西亞の新代の青年なんです、虛飾をはつて押出ばかりは、えらさうだが、腹の中はあの先生のやうに空つぽな、べら〳〵喋舌るばかりが能なんだ』といつた。

が、エレナはその詞には答へなかつた。今の所、魯西亞新代の青年の風尚なんといふ事よりは、インサロフの身體の方が餘程心配なのだ。

で、夫の傍に坐つて、何か仕事を始めた。夫は目を瞑つて白く絲のやうに痩せて、身動もせず横はつてゐる。エレナは夫の骨立つた横顔や、痩せ果てた手先をながめて、急に怖ろしくなつた。で、思はず

『あなた』といふと、インサロフはビクリとして『え、レンヂッチが來ましたか』

『いーえまだ――ですが、どうでせう、貴方は熱があるんでせう、全く惡い所があるんだわ、醫者を呼びませうよ』

『そんな事をせんでもいゝ、少し休めばすつかりよくなります、食事を濟ましたら、二人でまた何處かへ行きませう』

それから二時間すぎた。インサロフは相變らず長椅子の上に、横になつて

ゐるが、眠られない。其癖、目は開けては居ないのだ。エレナは片時も其傍を離れずに、仕事は膝の上に落したまゝて、じつとしてゐる。

『どうしてお休みなさらないの』

『少しお待ちなさい』と、妻の手をとつて、頭の下に敷つて『さあこれで工合がいゝ、レンヂッチが來たら直ぐ起して下さい、あの男が來て舟の用意が出來たと云へば、早速出發しますから、いろ〳〵荷造りもしなくちやならん』

『荷造に手間はとれませんわ』

それからしばらくして、インサロフは云ふ。

『さつきの奴、何か戰爭のことや、セルビヤの事などを喋舌り立てゝゐたが、あんな奴の云ふ事だから當にはならんが、それにしても立たなきや、どうしても立たなきやなりません、一刻も猶豫しては居られん、支度をして下さい』と云つてる下から、彼はぐつすり寢込んでしまつた。室の内は森と靜まり返

つてゐる。エレナは椅子の後ろに頭を推付けて、暫時窓の外を眺めた。天候はます〳〵險惡になつて、風さへ起つて來た。大きな白い雲の塊が、空の上を走つてゐる。遠くの方で、細い帆柱の風にしはつてゐるのが見える。赤十字の旗をかゝげた長い蒸汽船が、浮きつ沈みつ漂つてゐる。室に掛けた古風な大時計の振子が、物淋しい響を立てゝチクタクといつてゐる。エレナは眼を閉ぢた、昨夜終夜おち〳〵眠られなかつたので、次第にとろ〳〵と眠氣づいて來る。何時の間にか不思議な夢を見た。誰か見もしらぬ人々とツアリチナの湖に舟を浮べてゐる。其人々は物も云はずじつと坐つたまゝて、誰も舟を漕ぐ者もない。舟はをのづから動いてゐる。エレナは恐ろしいとは思はなかつたが、物淋しくてならない。この人達は誰なのか知らん、どうして自分はこんな人達と一緒になつたのかしらん、と考へた。見ると湖水は、いよいよ廣くなつて、汀は見えなくなつた。と、もう湖ではなくて、大波ののたくり返

へす海原である、眞蒼な大浪が音もたてずよせて來て、小舟を凄まじく押し上る。時には、海の底から轟といふ喊が膽を冷させる。見しらぬ同船の人々は、飛び上つて悲鳴をあげ、手を振りもがいて騒ぐ……エレナは人々の顏を見知つてゐる。父もその中にゐる。と思ふまもなく、白い旋風のやうなものが、波の上を渡つて來て——何もかも、くるり〳〵廻り出して、何もかも亂雜になつてしまつた。エレナは四邊を見廻はしたが、依然として見渡す限りたゞ眞白だ。けれども、それは雪だ、際涯も知らずたゞ一色の眞白な野原だ。そしてもう舟の中ではない。莫斯科から來たときの樣に、橇に乘つて旅行してゐる。自分一人ではない。傍には古外套に裹まつた小さな者がゐる。よく見るとカトヤだ。あの貧乏人の娘だ。エレナは怖ろしくなつて來た。

『や、あの人は死んだのに』と思ふ。

『カトヤさん、二人一緒に何處へ行くの』と問うても、カトヤは返事をしな

いて、小さい外套の中へ身體をます〳〵縮めるばかりだ。見ると凍えてゐるのだ。エレナ自身も寒くなつて來た。遠く前途の方を見わたすと細かく降る雪にすかして、町が見える。銀色の圓屋根の高い白い塔が……『カトヤさんカトヤさんあれ莫斯科ぢやないかしら、いやさうぢやない』と思ひつゞける

『あれはソロヱトスキーの僧院だ、小さな狹くるしい蜂の巣みたいな室ばかり澤山ある、はいると息の窒るやうな、身體を緊めつけられる樣な――ヂミトリさんはあすこに幽閉られてゐるのだ、妾はどうしても救出さなければ……』と思ふ間に、海暗い大きな穴が口を開いて、橇は中に落込むだ。カトヤは笑つてゐる。

『エレナさんエレナさん』と、穴の底から呼ぶ聲がする。

『エレナさん！』と明了耳に響いた。て、急に首を擡上げて見まはすと、驚いた。インサロフは雪、夢中に見た雪のやうに純白な色をして長椅子から半

身を起しかけて、大きな物凄い眼を見開いて、じつと自分を睨めてゐる。髪の毛は亂れて額にかゝり、唇は怪しく開いて居る。恐怖と哀憐の交つた苦惱の色が、その急に變り果てた容貌にあらはれて居る。

『エレナさん』と分明云つて

『私はもうだめです』

エレナは思はず叫んで、男の膝下に伏して、その胸にとりついた。

『もう萬事休しました、私は死にます……あなたにもうこれまで、本國にもこれまでです』と云つて、彼は仰向になつて、長椅子の上に倒れる。エレナは室を走り出て助を呼んだ。て、給仕は驅けて醫師を呼びに行く。エレナは再びインサロフにとり縋つた。途端、戸口に肩幅の廣い、日に燒け黑むだ男が、大きな羅紗の上衣、低い油布製の帽子、といふ扮裝で現はれて、たゞ茫然して突立つて居る。

『レンヂッチさん』とエレナは叫んで『あゝ貴方！どらんなさい、まあ急な病氣で、ほんとにどうしたんでせう、つい昨日まで外へ出歩いて、たつた今迄私に話しかけてゐたのが』

レンヂッチは一言も發せずに、そつとその傍へ近よつた。と、突然假髪と眼鏡をかけた小男が、つゝと傍をすりぬけた。それは同じ宿屋に泊つてゐる醫師で、急いでインサロフの傍に寄り

『奥さん』と二三分經つてからかう云つた『この方はもういけません。病名は……肺病と動脈病の併發です』

三十四

次の日、同じ室にレンヂッチは窓倚に立つてその前にはエレナが肩掛にくるまつて坐つて居た。次の室にはインサロフが柩の中に横たはつて居る。エ

レナは物怯するやうな、生氣のない顔をして、眉間に二筋の皺がよつて、じつとすえた眼差に權が加はつたやうだ。窓の上には、アンナから來た手紙が、開いたまゝ置いてある。その中には、娘にはたゞの一月でもいゝから、莫斯科へ來てくれといふことや、自分は狐獨でさびしいと云ふことや、ニコライにも困つてしまふといふ事などを細々と喞つて、インサロフにもその病體の安否をたづね、妻をいたはつてやつてくれるやうによろしくと、書いてある。

レンヂッチはダルマチヤの者で船乘である。インサロフの先年本國に流浪して居た頃戀意になつた男で、折からヴェニスに來るやうに頼んでやつたのだ武骨な、色も素氣も無い男で、スラヴ族の爲めには水火をも辭せぬと云ふ、凄まじい意氣込なのだ。彼は土耳古人を厭い、墺太利人を惡むだ。

『お前さんいつまでウエニスにおいでどすの』とエレナは伊太利語で問ひかけた。その聲にも顔にも生氣は無い。

『船積に一日かゝるとして、役人がうるさがすから、濟めば直ぐサラへ行かうと思つてます。この凶事を知らしたら、本國の者は定めて力を落すてせう。長らく待ちこがれて、一切この人に頼りきつて居たんですからな』

『一切この人に頼つて』とエレナは、愁然と鸚鵡返しをする。

『埋葬は何時にしませうな』とレンヂッチが聞くと、エレナは直ぐには返事が出なかつたが、やがて

『明日にでも』

『明日ですか、よろしい待つて居ませう。私も、せめてあの方の墓に、土の一塊も投げて上げたい。それにあなたも手傳ひが要るてせうし、だが、ならうことならスラヴの土に埋めてあげたら、あの方も本望だらうがなあ』

エレナはレンヂッチの顔を見た。

『ね、船頭さん、私をあの人と一緒に海をこして彼方岸に渡してくれなくつて？いけますまいかねえ』

レンヂッチは思案して、『いけん事もありますまい、けれど因難ですな、こゝの所、癪にさわる役人どもと喧嘩しなきやならんからなあ。まあそれはいゝとして、萬事都合よく運んだとして、あの人を彼岸へ埋めて來るはいゝがあなたをどうして送り戻したものかしらん』

『妾なんか連れて戻らなくてもよござんすわ』

『え、それぢや何所にあなたはお出てなるお心意です』

『妾は妾でいゝやうにしますから、たゞ連れてつてね、連れてつて下さい』

レンヂッチは頭を搔き乍ら『何もかも御承知のことなんだから、けれどそりや隨分困難ですよ。が兎に角やつて見ませう。ぢや二時間程して又參りますから』

彼は出て行つた。エレナは次の室へ行つて壁に凭掛つたまゝ、長い間、化

石したものゝやうに突立つて居た。やがて、バタリと膝まづいたが、祈禱の詞は出なかつた。かへりみて自分の心中に何の疚しい所もない。が、敢へて神の何故に己れを憐れまなかつたか、助けなかつたか、まこと自分に罪ありとするも、その罪の報以上に出て神は重い罰を加へたか、と云ふやうな事を問ひ正してまでも神の意を疑ふと云ふやうなことはしないのだ。人は皆その生けりといふ事實のみで、既に罪を得て居る。如何なる人類の大思想家大恩人といへど、その爲遂げた功業によつて、生くる權利を望む事は出來ない……かう思つて矢張エレナは祈禱をば得しなかつたのである。身はたゞ化石したやうになつて居た。

其夜、底の廣い小舟がインサロスの泊つて居た宿屋から漕ぎ出した。其舟にはエレナとレンヂッチが乘り込んで、其傍には黑布を蔽うた長い箱がのせてあつた。舟は小一時間漕ぎまはつて、終に港の入口に碇泊して居た二本マ

ストの船に着いた。エレナとレンヂッチは船の中に乘り移る。船頭等は箱を引き入れた。その眞夜中過に暴風が起つたが、翌朝暗い中に船はリドを遠くはなれた。其日一日暴風は凄じく吹き荒れて、船長連は首を搖つて難船を危んだ。ウエニス、トリエストからダルマチヤにかけてアドリアチックの海岸は殊に危險が多かつた。

エレナがヴエニスを出立してから三週間の後、アンナは莫斯科で次の手紙を受取つた。

『文してなつかしき御兩親樣に申上まゐらせ候。妾は今より皆樣方と永久のお別れ申上ぐべきにて候。もはや今世にてお目にかゝる事も候ふまじ。ヂミトリは昨日みまかり候ひぬ。今や妾が萬事はきはまり申候。今宵妾はかの人の亡骸を携へてザラに赴かんと存じ候。かしこにて埋葬を濟ませ候のち妾が身はそもいかになり候ふべき。自らも辨へ知らず候。さはれ今は妾

の本國と申すもの、ヂミトリが國より外には候はず。その國にては人々反亂の用意を調へて、戰爭の支度をさ〳〵怠りなしと聞き及び候。妾はその地の慈善婦人會の群に入りて病者傷者の看護の事に從はんと存じ候。妾が身の行末は計られぬ事には候へども、いつまでも〳〵亡き人の志を繼ぎ、その生涯の事業の幾分なりと果さばやと思ひ定めまゐらせ候。その爲めにプルガリヤ、セルビヤの言語も既に學び申候。十が七まて妾が身體はさる中に立ち交りて久しきを保たんこと覺束なくは候へど、そもまたなか〳〵に望ましきことには候はじか。妾はすでに斷崖の淵に臨める身、この上は脚すべらして落つる外は候はず。運命のわれら二人を繫ぎ合はし候も故なき事とは誰か存じ候べき。妾或はかの人を害ひしか。今や彼の人の後より妾の引かるゝ順とはなり候ひぬ。妾は幸福を求め候ひき。かくて妾が求め得べきは或は死のみにて候ふべきか。かくなり行くべきさだめに候ひしか。

はたまことは罪に候ひしか。……さはれ死は一切を消除し一切を滅却す。さには候はじか。妾が今迄にかけまゐらせ候おん嘆きのかず〳〵今は何事も妾の心を抑へかねし約束事と御ゆるし被下度候。さはいへど、とてもロシヤへは再び歸るべき身には候はず。よしロシヤに歸り候とも、そも、妾は何とか致し候ふべき。願はくば妾が最後の接吻、最後の祝福を受け給ひて、重ねて妾の罪を責め給はぬやうにとそれのみ祈り上げまゐらせ候。

Rより

三十五

ヴェニスから音信がありてから、殆ど五年を過ぎた。が、エレナの消息は、その後杳として聞えない。此方から出した手紙には返事が來ず、百方搜索もして見たが、矢張分らない。平和克復後、ニコライは自身ヴェニスからザラ